

妊婦さんは何が
大変だったの？

避難所でどうやって
出産したの？

赤ちゃん向け
の防災計画
は？

ママと 赤ちゃんの

復興

まちづくり
in 石巻

報告書

お腹の赤ちゃんも震災から守ってあげよう。

赤ちゃんがお腹にいるのは、人生の中でたったの9か月。

だからなのか震災時の妊婦のことは、経験もノウハウも受け継がれにくい傾向にあります。

でも、被災した妊婦がどうお腹の子を守り、産み、育てたのかを伝えることは、この街を素敵にしていくためにとても重要なことではないでしょうか。

だって新しい命を守ること、増やすことは、まちづくりの起点なのですから。

2014年10月24日(金)

宮城県石巻市向陽地区コミュニティセンターにて

主催：特定非営利活動法人ベビースマイル石巻

日本学術振興会科学研究費補助金「復興・防災まちづくりとジェンダー」

共催：文科省科研費「過疎と災害に resilient な妊産婦支援ネットワーク構築のための基盤的研究」

協力：東北すくすくプロジェクト

後援：石巻市、宮城県助産師会、

石巻市社会福祉協議会お産と子育てに

つよいまちづくりチーム

目次

シンポジウム記録	1
開会挨拶	2
石巻市役所ご挨拶	4
報告1「石巻赤十字病院の経験と取組み」	6
報告2「石巻市役所の経験と取組み」	10
報告3「避難所での出産と震災後に思うこと」	15
報告4「妊婦だから見えたこと感じたこと・体験を伝える（1）」	19
報告5「妊婦だから見えたこと感じたこと・体験を伝える（2）」	21
フロア討議	25
閉会挨拶	35
シンポジウムの成果と今後について	37
シンポジウムのまとめと今後の調査研究に関する検討会	38
参加者アンケート結果	40
ママと赤ちゃんと皆のためのまちづくりに向けて	42
『ママと赤ちゃんの復興まちづくり in 石巻』シンポジウムを終えて	42
子ども・子育て支援へ	43

シンポジウム記録

開会挨拶

NPO法人ベビースマイル石巻代表理事
荒木 裕美

おはようございます。皆様、本日は朝からお集まりいただきまして誠にありがとうございます。遠方からいらして下さった方もいらっしゃいますし、勇気を出してはじめての託児をされて来てくれているお母さんもいます。皆さんのお顔を見て、今回のシンポジウムを開催できたことを本当にうれしく思いますし、胸が熱くなる思いです。ありがとうございます。

今日は仲間と一緒に作る会で少しとどしい部分もあるかと思いますが、ご了承ください。

私の名前は荒木裕美と申します。本日主催をさせていただいておりますNPO法人ベビースマイル石巻の代表理事をさせていただいております。簡単にベビースマイルの紹介をさせていただきますと、震災直後、緊急時に立ち上がった団体です。そのころお母さん達は情報の不足や物資の片よりがあり、皆さん混乱をしていました。その中でお母さん達がつながる当事者ネットワークの大事さをすごく感じ、同じように感じた皆さんがバナーッと寄ってきて団体が出来上がっていきました。

また、親子の居場所や遊び場がなくなってしまったので、そういう場所を確保してみんなで子育てを楽しんで、こんな状況だけれど、子どもたちを大事に育てようと、居場所作りをしてまいりました。今では月に15回イベントやサロンをおこないながら活動をしており、メールでつながっているお母さん達は大体600人くらいになりました。

この平常時のつながりが、やはり緊急時に、必ず活きると思っておりますので、私たち当事者のネットワークだけではなく、地域の皆さま、全国、全世界、地球の全ての皆さんと、どんどんつながって、みなさんで支え合えるような、そういう関係をつくっていかたいなと思って活動しております。

今回のシンポジウムですけれども、私が震災のあとからほかの地域に行って、「震災時にはお母さんたちはどうだったんですか、妊婦さんはどうだったんですか」と訊かれることがよくありました。

そして、フォーラムに参加したり、シンポジウムに参加するたびに、皆さん今回の震災を教訓として、自分たちの地域で、どうやってお母さん、赤ちゃんを守っていくかということを取り組みにしていってほしい姿を見てきて、石巻でも「私たちが体験したからこそ地元から発信したい」という思いが、どんどん強くなってきました。

また、被災地であるからこそ、今後、災害はまた繰り返す可能性もある。そういうことを考えたときに、地元で発信していくということの重要さが、どんどんと自分の中で強くなりました。

それで、「やりたいな」などということを出していましたが、やはり被災地では、なかなか振り返るという余裕もなく、みんな前を向くのも精一杯というなかで、やりたいけれどもやれないような感じでした。

ずっと口に出していましたが、少しずつ皆さんからも「大事だね」とか、「発信したいね」という声が出てきて、3年半、もう4年になりますが、いまの時期になって、やっと開催できるタイミングとなりました。

今回の開催のきっかけをいただいたのが、共催をさせていただいております、大阪府立大学の山

地先生、田間先生です。山地先生と田間先生との出会いがあり、今回の会を持てましたことを、本当に心から感謝しております。ありがとうございます。

今回の会ですけれども、赤ちゃん、妊婦さんをどうやって守ろうかという話をするときに、さまざまな壁があるものだなというのを、私自身、このシンポジウムを開催するために動くにあたって感じました。

その壁といっても、仕組みを変えたりするということは、すごく難しいことだということを感じております。突然そういうことはできないけれども、でも、まずは、そのときの妊婦さんが震災時にどのような状況だったのかを共有したりして、知って考える会、それをもちたいということで、今回はそういう会になっております。

私たちは、いまだけではなくて、この地域でずっと、孫、ひ孫、その先という感じで、安心して安全な子育てをやっていきたいと願っております。また、安心して妊娠、子育てができる地域となるための取り組みこそが、子育て支援、まちづくりにつながっていくと強く感じております。

被災地からの人口流出や、少子化の問題などもあるこのような地域だからこそ、とても大切な取り組みになってくるのではないかと感じております。

なので、本日は、パネリストやご講演いただく皆さんも、大変に緊張しております。本当に、勇気を出して参加してくださっている、当時妊婦だったお母さんたちも2人います。皆さん、温かい視線で最後までよろしくお願い致します。

石巻市役所ご挨拶

石巻市復興政策部地域協働課
課長 安倍 秀一

皆さん、おはようございます。いま紹介をいただきました、復興政策部の地域協働課の課長をしています安倍と申します。

私の方は、部署的にはコミュニティーづくりの関係する部署ということで、特に町内会とか、あとはいろいろな団体との付き合いの中で、どうまちづくりをしていくかというところを手掛けている課でございます。

今回、ご案内をいただきまして、本来であれば市長の方が来て皆さまにごあいさつを申し上げるところですけれども、ほかの公務がありましたので、私が代理として来たわけですが、私のほかに福祉関係の部署もまわっておりますので、今日のシンポジウムをじっくり拝見させていただきたいと思っております。

私は、個人的にも震災時には専修大学の方で、ちょうど避難所運営に、若干4日間ほど携わりました。そのときに、バスとか、自衛隊の車両で被災者の方々が搬送されてきたのですが、そのなかに、当時出産を控えた親子連れの方もおりました。すぐ生まれるような状態ではありませんでしたが、片手に子どもを引き連れて、荷物を背負ってということで避難所に来たのですが、荷物を一緒に持って歩きながら大変心配そうにしておられました。

やはり、震災後どうなるのかという、あのときには、こういうふうにすぐに復興するとは思っておりませんでしたので、どうやって出産をしたらいいのか、どうやって子どもを育てていけばいいのかというところで悩んでいたのではないかと思っております。

今日、このような機会での、いろいろなご意見を踏まえて、いわゆるまちづくりに、どうつながっていくかというところがあり、私たちも大変興味深く思っております。今日は、市長の方から、開会にあたってのごあいさつを預かってきましたので紹介致しまして、私のあいさつと致します。

本日開催の「ママと赤ちゃんの復興まちづくり in 石巻」の、ご盛会を心よりお祝いを申し上げます。

あの震災から3年7カ月が経過し、皆さまのなかには時がたつにつれ当時の記憶も次第に薄らいでいるという方、とにかく、先にある希望だけを見つめて、振り返らず一生懸命に今日まで過ごされてきた方も多いことと思っております。

あのとき、妊婦さんの立場であった方、小さな赤ちゃんを抱え避難所に駆け込まれた方など、皆さまにとって大変つらい思いをされたことと思っておりますが、こうした震災での過酷な経験と教訓は後世の人々に伝えていくとともに、今後のまちづくりに活かしていかなければならないことと思っております。

ただいまから始まるこのシンポジウムにご出席の皆さんは、日ごろより震災の教訓の一つである、防災面に対しても強く感心をお持ちのことと思っておりますし、妊婦さん、あるいは子育ての途中のお母さんからの視点で学んでいきたい方もおいでになっていることと思っております。

ぜひ、講師の先生の貴重なお話に耳を傾けていただき、あのとき、さまざまな立場で経験されたこと、気付いたことなど、多くのことを学んでいただき、再び起こるかもしれない震災を乗り

越えられるよう、知恵、英知を養いながら、今後に生かしていただければ幸いに存じます。

結びに、本日開催されますシンポジウムのご成功と、主催者であります特定非営利活動法人ピースマイル石巻さまの今後ますますのご発展、そしてご来場の皆さまのご健勝、ご多幸をお祈り申し上げ、あいさつと致します。

平成26年10月24日石巻市長、亀山純。代読。

今日は、一生懸命、私の方も参考にさせていただきたいと思います。よろしくお祈り致します。大変、ご苦労さまです。

○司会 ありがとうございます。

続きまして、本日、お忙しいなかご出席いただきました市役所の皆さまをご紹介させていただきます。

まず始めに、ただいまごあいさつをいただきました、石巻市復興政策部地域協働課長、安倍秀一さま。地域協働課、岡田桂奈さま。福祉部総務課課長補佐、青木正博さま。

○青木課長補佐 青木でございます。よろしくお願い致します。

○司会 同じく、福祉総務課主査、高橋幸さま。

○高橋主査 高橋です。よろしくお願い致します。

○司会 また、シンポジウム途中からとなりますが、総務部危機対策課、福祉部子育て支援課、健康部健康推進課より、ご出席のご連絡をいただいております。誠にありがとうございます。

報告1「石巻赤十字病院の経験と取組み」

石巻赤十字病院病棟看護師長
真坂 雪衣

おはようございます。石巻赤十字病院で看護師長をしております、真坂と申します。本日は、このような会にお招きいただきまして、ありがとうございます。

私は、実は、震災後こうして、人前でお話しをさせていただくのが、震災のことに関しては初めてで、話せるかなと思えるようになるまで3年くらいかかった感じがあります。ですので、少しお聞き苦しい点もあるかとは思いますが、今日はお付き合いをお願いします。

今日は、石巻赤十字病院の役割と備え。あとは、産科の役割と備え。東日本大震災で起こったことと今後の課題ということで、ちょっと話は前後したりもしますが、お話しをさせていただきたいと思います。

まずは、石巻赤十字病院の役割と備えということでは、ご存じの方も多いとは思いますが、当院は石巻医療地区における災害拠点病院になっております。災害拠点病院の役割としては、大規模災害時に多数の傷病者を受け入れる役割と救護活動の使命があります。

それに向けて、新築移転のときには施設設備も災害に対応できるようにということで備えをしてきておりました。あとは、日ごろから救護活動、救護訓練なども行っております。実際に、定期的に、毎年結構な回数の訓練は院内で実施しております。

そして災害の2年前からは、それまで災害対策マニュアルは院内の患者さんをどうするかというマニュアルはあったのですが、大規模災害時に多数の傷病者を受け入れるにあたってどういうふうに動いたらいいかというマニュアルの作成を、約2年近くかけて行っておりました。プロジェクトチームを立ち上げて、マニュアルを作成して、それを今度は実際にどうしていったら動けるかということで訓練を重ねてまいりました。

そして、実際に震災が起こったのですが、幸いにも職員と患者さんにけが人などは一切出ませんでした。施設設備に関しても、ほとんど被害はなくて、エレベーターが3日間使用不可とはなりましたが、これは故障ではなく点検するまでに乗者が来るのに3日間ぐらいかかってしまって使えなかったという状況です。

電気と水道に関しては、備蓄の自家発電と、貯水タンクからということで通常どおりとはいかないまでも、ある程度最低限のものは使えた状況でした。

当院の産科の役割としては、とにかく妊婦さんを守ることですので、災害時は助産センターで24時間妊婦さんを受け入れられる体制を取っています。それも、妊婦さんは災害時には要援護者と位置づけられており、もともと災害弱者と言われていたのですけれども、危険回避行動とか避難行動などに、他者による援助を要する人々ということで乳幼児や妊婦さんも含まれています。

日本赤十字社では、厚労省の補助事業の一環で、平成18年に「災害時要援護者対策ガイドライン」というものを策定しております。そのなかで、妊婦さんは自力で移動できる人は多いのですが、素早い避難行動などが困難な場合が多いということで位置づけられております。また、精神的動揺などによって状態が悪化することもあるということを言われております。

実際に、東日本大震災のときの妊婦さんは、救助が始まったときには優先的に救助されて当院

に搬送をされてきました。診察後は、陣痛が来ても病院に来る手段がないとか、診察で帰っていいよと言われたけれども、帰る手段がないという方も多数いらっしゃいました。

一番多かったのは、症状はないけれども、「妊婦だと言ったら運ばれてきたんです」という方が、すごく多くいらっしゃいました。ですが、先ほども言いましたように、やはりストレスによって状態が悪化することもありますので、「症状がないからいいや」ではなくて、やはり症状がなくても一度は診察を受けて安心をしていただくということも、すごく大事かと考えております。

そんななかで起こったこととして、震災当日から、本部には市内の情報がたくさん集められてきて、救急隊の方からも浸水域を次から次へと報告されて、地図の上にマーキングしていたのですが、それを見ていくうちに、すぐに市内の分娩施設が一時的に機能困難な状態に陥るということは、予測されました。ですので、当院にお産が集中するのではないかとこのことを予測しました。

困ったことというのが、まずは人が足りないということです。お産に対応するには、院内にいくら看護師がいても、やはり助産師でなければならない部分も多くありますので、まず助産師が特に足りないという状況と、ものが足りませんでした。

当時は、物品を搬入している業者も一週間以上連絡が取れないというところもありましたので、お産が増えて、それに対応するものをどうしようというのと、あと一番の大きな問題が入院のベッドがなくなるということでした。とにかく、これをどうにかしなければいけないと思いました。

まず、最初に人の確保をどうしようかと思ったときに、幸い、当院は日赤病院ですので、上司に訴えて本社に依頼を掛けました。3月15日から2カ月間で述べ101人の助産師が全国から応援に駆け付けてくれました。だいたい、1回5人ぐらいでシフトを組んで入ってもらったのですが、それで、どうにか急場をしのぐことができました。

これは赤十字のマークで、「人間を救うのは人間だ」というのが赤十字のスローガンになっているのですが、震災のときほどこれを痛感したことはなかったと思います。

次に、ものの確保です。業者とも連絡が取れない状況のなかで、ミルクとか、おむつとか、おくるみ、衛生材料の全てが不足しました。初めのうちは備蓄でどうにかできるかなと思ったのですが、これ以上は対応できないと思い、最初は救護班で来る病院にお願いをして物資を持ってきてもらっていました。

あとは、市内の開業医さんが、コットや、新生児のおくるみなどを、自分のところでは、一時的にお産は取れないけど、ぜひこれを使ってくださいと言って、わざわざ病院に届けてくださったりもしました。

また、3月15日に、ニュースに出させていただいて、こういうものが足りないということを訴えさせていただいたところ、市民の皆さんがわざわざ病院に届けてくださったり、あとは全国の方々から、本当に少しでもと言って、ものを送ってくださったりして、すごく助かりました。

最後には、業者さんもようやく連絡がとれて、4月ぐらいからは無事に稼働できた状況です。

そんななか、ミルクの不足もすごくあったのですが、お母さんたちが、「とにかく、母乳を頑張ります」と言って頑張ってくれて、震災当時はすごく母乳率も上がって、「よかったね」と喜んでいたのでした。

その反面、退院されたあとに避難所に帰られたあとに、やはり周りを気にして、落ち着いて母乳を与えられる環境ではないとか、あと、少し日がたってくると、避難所とか、仮設住宅では、赤ちゃんが泣いてしまうので、周りに気を遣って、やっぱりすぐミルクを与えてしまいますといった声がよく聞かれました。

今後の課題としては、災害時に母子が安心して過ごせる場所の確保というのは、すごく重要になってくると考えております。

ほかに関ったこととしては、入院患者さんに一番迷惑を掛けてしまったことで、入院ベッドがないという状況でした。とにかくベッドを確保するために、個室の空いているスペースにマットを敷いて増床をしたりしました。

あとは、通常は経産婦さんですと4日目、初産婦さんだと5日目で退院ということになっていたのですが、当時は3日目で退院をしていただかなければいけない状況でした。ですが、皆さんは不安だけれども、自分だけわがままは言えないとか、この子を守るのは自分だけだと、お母さんの強さを見せてくれて、本当に助かった状況でした。

助産師も、育児指導も十分にできず、ガスも使えなかったので沐浴もできないという状況でお帰りのただぐということも、すごく助産師も日々葛藤をしている状況でした。

ですので、せめて保健師さんに、1日も早く新生児訪問をしてもらいたいと思ひまして、保健師さん、今日いらしている水沼さんとかと一緒に話し合いをしたり、名簿を作成したりして、各市町村に連絡先をお配りして、とにかく早めに新生児訪問をしていただいたということがあります。また新生児訪問に行けないような時期は、当院の助産師によって電話訪問などもさせていただいていました。

あとは、一時的に妊娠高血圧症の妊婦さんが増加していました。震災のそのもののストレスですとか、あとは、どうしても親戚のうちとか知人のうちに非難しなければいけないといった生活環境の変化ですとか、一番大きかったのは食生活ではないかなと思います。

非常食や支給されるお弁当など、ほかの方々と同じようなものを食べているというような、それだけではないと思いますが、さまざまな要因が重なって、妊娠高血圧症の方が増えたのではないかと推測しております。

これらのようなことを考えますと、やはり妊婦さんとか赤ちゃんにとって、安心して生活できる場というのが、平常時はもちろんですが、災害時のようなストレスの大きい時期には、なおさら必要ではないかと思っております。

また、今回、すごく感じたのは、早めに帰っていただくにしても、無事に生活ができるかなという心配もありますけれども、保健師とか、助産師が、例えば、こうして避難所のようなところがあって、そこに介入することができると、やはり安心感にもつながります。

そういった場所があるということで妊産婦さん、乳幼児に必要な物資の供給の窓口になるのではないかと思います。今後は、行政や、医療機関、住民で検討をしていかなければならない大きな課題ではないかと思っております。

また、当院が震災後に始めたのは「きずなメール」です。登録されていた方もいらっしゃるのではないかなと思うのですが、これは災害時、いざというときに妊婦さんに必要な情報を届けたいという思いで始めました。

災害時には、結構情報が取りにくいということもありましたし、誤った情報ですごく混乱して

いるということもありました。事実、当院でも入院している赤ちゃんのミルクが、ぎりぎり確保できるという状況で、外の方に配給はできないということにしていたのですが、日赤でミルクがもらえると聞いたからといって、病院にもらいに来るという方も少なくともありませんでした。

こういった、「きずなメール」などをとおして、ものとか人の情報というものをつなげていく一つの手段になったらいいなと思って、これは現在も続けさせていただいています。

最後になりますが、公助、自助、共助とあるのですけれども、まずは自助というところで、普段から備えていただきたいと思います。

どんな情報を、どういふふうに取りれるかなというのは、災害時のとき急にはできませんので、普段から赤ちゃんに対する情報というものはどういったところに出しているのかなとか、そういう情報を取っておくことも一つです。

非常時の持ち出しグッズも、「1回そろえて安心」ではなくて、やはり、お子さんの成長に合わせて中身を入れ替えたり、また、ご家族から、こういうときには避難はどのようにするのかどうかということ話し合っておくということも大事かと思えます。

あとは、ご自分の住んでいる地域を、どういふふう知っているかという。どういふ災害に弱いとか、どんなところに避難場所があるかとか、どんなルートを通るか。

今回、私も思ったのですが、震災当時、自宅のアパートにいて被災をして、病院にすぐ行かなければいけないと思ったのですが、普段の通勤路がすごく渋滞していて、まったく車が動かない状態だったわけです。

本当に、1分でも早く病院に行かなければならないと思い、あまり普段は通ったことのない裏道を通ったら全然車がいなくて、1時間で病院に着けたということがありました。ですので、避難場所までのルートを知っておくということも1つ大事かなと思えました。

ですので、普段から、大きな地震が来たから、もう来ないではなくて、次に備えて、普段からこつこつと備えていったらいいのではないかと思います。

簡単ですが、私のお話はこの辺にさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

報告2「石巻市役所の経験と取組み」

石巻市役所河北総合支所保健福祉課保健師
水沼 文子

皆さま、こんにちは。石巻市の河北総合支所保健福祉課の水沼と申します。

震災時は、本庁の健康推進課におりました。そこでの、母子保健の担当ということをしていて、そのときの取組みについてお話ししたいと思います。

本当に、市役所での取組みということでしたので、今日、参加していただいています。妊婦さんとか、お母さま方ご自身については、どの程度参考になるかというところは、ちょっと不安なところもありますが、皆さまと一緒に考えていけるステップになればなというふうな思っておりますので、今日は、よろしくお願ひ致します。それでは、始めます。

石巻市の被害状況は、平成26年8月末現在で、死亡者が3千304人。行方不明者429人。家屋状況についても、このような状況で、被災市町村のうち最大となっております。震災孤児46人、遺児214人の数についても県内全体の3割以上を占めています。

本庁および総合支所の被害状況については、本庁は市役所が1.5メートル浸水し、職員は3日間に閉じ込められ、情報が取れない状況でした。

河北、河南、桃生地区においては、総合支所の被害はありませんでした。雄勝、北上地区については、総合支所が津波の直撃を受けまして壊滅的な被害を受け、北上では職員30人ほどと、数十人の避難者のうち助かったのは職員3名だけと聞いております。牡鹿地区においては、総合支所および市立病院が高台にあったので被害がなかったということです。

医療機関の診療状況と、支援状況についてはさまざまな状況でした。内陸で津波被害が少なく、地元医療機関が当日、または翌日から診療ができた河北、河南、桃生地区。

地区の津波被害は大きかったですけれども、病院が高台にあり被害が少なく、当日から診療や対応ができた、牡鹿と北上地区。

津波被害を受けながらも、地区の医療機関の開業医のドクターの方々とかが翌日からボランティアで診療所の巡回診療などをできたのですけれども、市役所の庁舎の被害、浸水のために行政側の連絡調整ができず、16日の日赤医療チームの巡回診療の開始まで時間がかかった本庁地区。

津波被害が大きく、21日の日赤医療チームの診療開始まで医療の必要な人は内陸の病院搬送とか、誘導するしかった雄勝地区となっております。

次に、保健師活動の実態について報告致します。震災直後に、指定避難所5カ所に保健師が2名ずつ派遣され、避難者への対応を行いました。指定避難所ではなかった市役所にも大勢が避難されて対応にあたりました。

津波の直接被害を受けた総合支所では屋上で一晩寒さに震えながら、避難者の対応をしたり、診療所のドクターとともに、避難者のトリアージ対応など、通信手段のないまま、被害状況が分からないまま、指示のないまま、それぞれの活動を行いました。

震災3日目になり、本庁地区では浸水をして孤立していた市役所に長机をつなげて応急的に橋をつくって、それを渡り避難所の健康実態把握のための巡回と、不足物資やトイレの環境チェックのための避難所アセスメントが開始されました。直後は、妊産婦支援などの母子保健活動に

特化するものではなく、全ての人の対応に追われました。

被害の大きかった総合支所では、避難所や医療が確保されていなかったために、乳幼児や妊産婦については高台の民家や内陸の避難所への避難誘導しかできない状況でした。また、震災のなかでも新しい命の誕生が行われました。病院にたどり着くことができず、避難所や民家で出産した方が、私の把握している方で3名いらっしゃいました。

Aさんにつきましては、津波の直撃を受けた避難所で、近くの眼科の看護師さんと、学校の先生の協力でお産をされました。Bさんについては、これからお話をいただきます。あべクリニックの小田嶋助産婦さんが対応をされた方です。Cさんにつきましては、避難所に派遣された市の保健師と市立病院の看護師の協力、夫の実家で、夫の両親に見守られて出産をしました。

この出産に立ち会った保健師が、その後話していたことを紹介致します。自分が、そこにおいて何ができるかを考えるのではなく、行って何かできるならと考えて、避難所に迎えに来た家族とともに暗闇の中を自宅に向かったそうです。

自宅に着いたとき、陣痛は5分間隔から3分間隔になり、まさに生まれるばかりの状況だったそうです。震災のなか、命懸けで避難をし、夫との連絡も取れずに安否確認もできず病院にも行けず、どれほど不安で心細かったかと思うと妊婦さんにこれ以上の不安の上乗せはできないということを感じ、出産の知識とか経験については不十分ながらも、母子の命を助けたい、助かってほしい、その思いだけで無我夢中だったそうです。

そして、妊婦さんに一緒に何とか乗り切りましょうと伝えて、精一杯そのときの自分のいま持てる力を注ぎ込んで、誠意を尽くし、幸い無事にお産されました。その後、母子の安否が気に掛かり元気でいてくれることを信じて仕事を続け、一カ月後に市役所で再会できたときには、お互いの元気な姿を確認できて、とても喜び合えたそうです。

この、保健師にとって震災の夜に誕生した児の成長が、被災した石巻が、復興に向かい進んでいく歩みと重なることも話しておりました。

4日目から1カ月までの活動については、避難所巡回相談、日赤医療チームとの巡回診療、県内保健師チームの活動、協力、心のケアチームの活動と、感染予防を目的としたノロウイルス対策、トイレ・プロジェクトも保健所と共同で開始されました。

3月30日からは、多くの支援者、保健師ほか、いろいろな方の支援のもと、支援の方々と、市のスタッフとの全体ミーティングが、毎朝7時から行われました。

母子保健活動としましては、各避難所の妊婦把握、先ほどお話ししていただきました。真坂師長さんと一緒に、日赤病院との打ち合わせでは、石巻医療圏では、もともと少なかった産婦人科と、小児科の全ての開業医が被災をして、全ての妊産婦、乳幼児の患者受け入れが、日赤病院だけになるということで、調整が行われました。

日赤病院の負担軽減のため、妊婦健診は近くの診療所で行い、お産は分娩施設へという産科セミオープンシステムの導入の準備も行いました。産婦人科医院への巡回によって医院の被害状況の確認と、セミオープンシステムへの協力をお願いを致しました。また、津波での流出による母子手帳や、妊婦健診助成券の再発行も、月に2、3百冊ありました。新生児訪問も、10日目の21日には開始致しました。

管内の産婦人科の状況となっております。被害がなかったのは、日赤病院のほか震災前は婦人科のみの診療で妊婦健診は行っていなかった一カ所だけでした。ほか、妊婦健診と分娩を扱っ

ていた全てが被災し診療ができない状況でした。しかも、そのうちの2カ所については再開不能で閉院となりました。

産婦人科医院の被害による影響としては、妊婦健診、出産できる病院の減少があり、出産を終えた産婦さんは産後3日で退院となる状況でした。それにより、母乳栄養指導が不十分だったり、黄疸のチェックが困難だったり、体重増加のチェック困難とか、さまざまな問題が出てきました。

そのため、新生児訪問を、先ほどもお話をしたのですが、10日目の3月21日から開始を致しました。毎日の避難所巡回では、母子の問題がほとんど浮き上がってきませんでした。避難している産婦さんとか、乳幼児はいるのですが、困っていることについては、上がってくるのは高齢者と障害者の問題が多かったため、早期に新生児訪問を開始し、直接話を聞く必要があると感じ開始しました。

直後の訪問では、電気、水道、ガスのライフラインがストップしているにもかかわらず、井戸水を利用し、薪を焚いてお湯を沸かし、赤ちゃんの沐浴などをして、何とか家族で工夫して、安全なところに身を寄せて子育てができていたことにはとても驚きました。

また、赤ちゃんを家族だけではなく、周囲の人たちが、みんなで守ろうとしている姿にも感動致しました。さらに、赤ちゃんがいることで、震災のとても厳しい環境のなかではありますが、お母さんをはじめ、家族周囲の人たち、そして訪問した保健師までも、心の温かさを感じて癒やされました。

そんななかで、震災により良かったこともありました。先ほども、お話があったのですが、母乳率がアップしたことです。確かに物資の不足は、間違いなく影響をしていることではありましたが、大変喜ばしいことでした。

なかには、震災前はミルクだけだったが、震災により、ミルク哺乳瓶、お湯、電気のない状態で赤ちゃんに泣かれて、母乳にすがらせるしかなかったお母さんが、痛みに耐えながらも吸わせ続けて、完全母乳にできたという人もいらっしゃいました。諦めないで、飲ませ続け、吸わせ続けることの必要性を実感致しました。

日赤病院はじめ、再開した病院については、母乳指導にとっても熱心だということを知っています。しかし、どうしてもミルクが必要な場合については、震災時には、赤ちゃんが混乱をしないように哺乳瓶を使用せず、コップ授乳を勧めていた場合もありました。

母乳栄養については、その後の、3～4カ月健診において、平成22年39%だったのですけれども、その後も、年々増加しており、平成25年にはわずかではありますが45.6%と2人に1人ほどになっております。

住民の安心を取り戻し、復旧のためには平時に戻すことの必要性を強く感じ、1カ月が過ぎた4月18日に、乳幼児健診再開に向けての母子保健担当者の打ち合わせを行い、乳幼児健診再開の必要性について全員一致で確認できました。

その後、乳幼児健診再開に向けて小児科医師の協力お願いのための巡回も行いました。また、被災妊産婦への県外避難受け入れ事業も始まり、事業の周知や事業への対応も始まりました。

6月に、やっと準備が整い乳幼児健診が再開されました。健診時に紙おむつやミルクなどの支援物資の配布も行い、皆さんにとっても喜ばれました。しかし、直後には支援物資の配布が必要な人に届かない状況が多かった反省もあります。

そのほかの通常業務についても、順次再開されました。子育て自主サークルの活動も再開され

ました。被災のため仮設住宅入居などの引っ越しなどを余儀なくされ、集会所などの活動場所がなくなり休止や解散してしまったサークルも多くありました。

そんななかで、今回の主催のベビースマイルさんのように、自主サークルからNPOへと成長し、ママたちの持てる力を発揮し、多くのボランティアを巻き込み生き生きと活動しているサークルもあります。私たち保健師にとっても、とても頼もしい存在になっております。今日のような場もありありがとうございます。

乳幼児健診の再開では、平成23年度の健診は、全てにおいて22年度の受検率を上回りました。その後、平成24年、平成25年と、さらに少しずつ上昇しております。

震災直後については、市外に避難していた方も、とても大変な状況のなかではありましたが、受検していただいて、本当にうれしかったです。やはり、健診を待ち望んでいてくれたということが分かりました。

震災業務で、目の回る忙しさのなかではありましたが、乳幼児健診を再開できて本当に良かったと確信しました。そのなかで、避難所や、仮設住宅や、戸別訪問では把握できなかった乳幼児と家族の避難状況が確認できました。

親御さんの安定しない生活や、心の状況でフォローが必要な場合については、心のケアチームのタイムリーな支援も行われました。

3カ月以降については、これらの事業も行われました。助産師会の支援については、周知が徹底しなかったために利用者が少なかったのが、とても残念に思っております。

震災後に見えてきた問題が、いくつかあります。入籍予定なしの方、パートナーがいない方。震災で、親や家族を亡くした方、または、家族が疎遠で子育ての支援者がいない方。妊娠中期以降の母子手帳交付や、出産後の母子手帳交付なども出てきました。

これらのことから、平時から行政はもちろんですが、住民自身も備蓄品や非常持ち出し品の準備等、避難所の把握をしておく必要が大事ということを感じました。そして、家族や地域住民とともに避難訓練への参加などを通して、実際の避難経路の確認が必要と感じました。

19日に市の避難訓練が行われましたが、参加された方が何名おられますか。実際には、参加率が非常に少なかったということで、昨年よりも少なかったという状況で、本当に大きな震災を体験された石巻市でさえも、意識がいろいろに変わってきているということを感じました。

それから、避難訓練のお知らせと一緒に、『津波避難先一覧』というものが、それぞれのご家庭に配られているのですが、これも確認していただいたでしょうか。もし、まだの方は、また確認をしていただいて、実際の場所なども確認していただければと思います。

あとは、避難のときには情報もなくなるというところで、今日の資料でもお渡ししていますが、災害情報テレホンサービス、メール配信サービスというものがありますので、よろしければこちらに登録をしていただければというふうに思いました。

また、母子避難所の必要性も感じました。多くの方は、自主的に安全な場所に避難できてはいたのですが、そうでない方や、被災直後は混乱しているときなので、早くに妊産婦を含めた母子が安心して過ごせ、自分の要望をきちんと言える母子避難所の必要性を感じました。それにより、必要物資の配布とかもできるのではないかと思います。

そのためには、やはり行政の準備はもちろんですが、住民皆様のご意見とか、ご協力が不可欠だと思っております。さらに、産科と小児科の病院の充実も、人口減少が大きいこれか

らの石巻市にとっては、とても大きな課題だと思われます。待ち望んでいた市立病院の建設も始まりましたが、そちらの市立病院への期待も大きいのではないかと思います。

最後に、震災だけではなく、さまざまな要因から子育ての支援者がいないお母さん方が増えている状況ですので、子どもをお母さんや家族だけではなく、行政や地域全体で支える体制を一緒に考えていければなと思っています。

これらのことについて、それぞれの立場で何ができるか、これから一緒に考えていきたいと思っていますので、いろいろとご協力を、よろしくお願い致します。

これで、終わります、ありがとうございました。

報告3「避難所での出産と震災後に思うこと」

あべクリニック産科婦人科助産師
小田嶋 清美

こんにちは。あべクリニックで助産師をしております、小田嶋清美と申します、よろしくお願
いします。

今回は、このような機会にお招きいただき、ありがとうございます。今日は、東日本大震災の
翌日に私が体験したこと、そして、震災から3年7カ月がたった現在、助産師として感じるこ
とをお話したいと思います。

まず3月12日、民家での出産に立ち会うことができました。震災の前日、3月11日は、仕
事が休みで娘の予防接種のために病院を受診していました。順番を待っている途中で地震が起
きました。状況が分からず、発生から30、40分ほどたったころ、ほかの2人の子どもを迎え
に行くために病院を出ました。

そのとき、外は雪が舞い、道路は信号が止まり大渋滞でした。それでも、小学生と保育園の子
どもを迎えに行かなくてはと、津波警報が発令されるなか車を走らせましたが、行く先々で通
行止めに合い、結局子どもたちを迎えに行けず最終的には、津波が迫っているのを、車を乗り捨
て警察署に避難することになりました。

余震の続くなかで一晩過ごしました。避難してきた方が持ってきたラジオを聞いて、これまで
とは比べものにならないぐらいの地震だということ始めて知りました。次の日の朝、警察署は
遺体安置所になるということで、警察署に避難していた全ての人が山の上にある避難所へ移る
ように言われました。私たち親子は小学校へ移りました。

到着してすぐ、破水した妊婦さんと出会いました。その方は、里帰り出産のために帰省されて
いて地震に遭いました。地震のあとの津波でご実家が1階まで浸水し、傾きかけた家の2回で一
晩過ごしているさなか破水したそうです。

陣痛はなく、避難所の方が安全ということで、朝に避難してきました。石巻赤十字病院と連絡
済みでドクターヘリの要請をしているというので、ヘリが来るまで経過を見るために付き添い
ました。

ヘリは上空を飛んでいるものの救助の人が最優先ということで、なかなか来ませんでした。そ
んななか、経過中に陣痛が開始、子宮口が2センチ開いていて、痛みが強くなってきました。陣
痛は強くなる一方で、でもヘリコプターは来ず、避難所で出産を余儀なくされました。

しかし、避難所は寒く不衛生で、避難所の保健師さん、市の職員の方と話し合い、近くの民家
を借りて、自宅出産することにしました。自宅に移ってから18時過ぎ、暖かい布団の上で元気
な男の子が誕生しました。

私が、民家での出産に踏み切れた理由は2つあります。1つ目は、必要最低限のものがそろっ
ていました。2つ目は、サポートする方、協力をする方がたくさんいました。実際に使用した物
品は、ほとんどお産に使う器械はありませんでしたが、保健室にあったものは、脱脂綿、ガーゼ、
消毒液、アルコール、あとは、最近購入したということでアルミクシート、冷えを防止するた
めのシートが置いてありました。あとは、点滴です。普段、保健室にはありませんが、近隣の医
療機関より提供していただきました。

臍帯の処置として、クリップの代わりに民家にあった絹糸で3カ所縛りました。臍帯の切断は家庭用のはさみをアルコールで消毒して切断しました。

寒かったので赤ちゃんの体温低下防止のために、赤ちゃんを直接アルミクシートで包み、バスタオルでその上から包みました。そして、貴重ではあったのですが、保健室の先生が提供してくださった飲み水を沸かしてペットボトルに入れたものを湯たんぽ代わりにして代用しました。

民家での出産を通して感じたこと。1つ目、お母さんには産む力が備わっていると思いました。2つ目、赤ちゃん、子どもは誕生日を自分で決めて生まれてくると思いました。

なぜかという、妊娠出産は病気ではありません。経過が順調であれば、普段とあまりほとんど変わらない生活を送れます。順調なマタニティライフを送り、お産を乗り越えられる心、体、環境などが整っていれば、女性には産む力が備わっているので、医療の介入は少なくお産はできると考えます。

赤ちゃん、子どもも誕生日は自分で決めて生まれてくる。また、生まれたくなくなったから生まれてくると思っています。帝王切開や、誘発分娩でなければ、自分で誕生日を決めて生まれてくると思っています。

陣痛は、赤ちゃんが起こすと言われています。陣痛はリラックスすると強くなります。ですので、危険な場所などでは陣痛は起こりません。もしあったとしても、強くはないので生まれないと考えられています。

民家での出産をしたときも、移動したあとに陣痛が強まり、お姉さんが片時も離れずそばでサポートしてくれました。安心、安全、そしてリラックスできる条件が整い陣痛が強くなり、進んだと考えられます。

次に、災害時の妊産婦の状況について、自分が思うこととお話します。私自身も、避難所で5日間ほど過ごしました。震災のあった3月は寒さがまだ厳しい時期で、避難所で妊婦さんも一般の方と同じところで過ごしました。

また、初めの3日間は物資が届かず、水、食料もない厳しい状況でした。そんななか、善意でゼリーなどの配布はあったのですが、数に限りがあったため、配布の優先は子どもとお年寄りでした。妊婦さんへの配慮が不足していたように感じました。

ライフラインが途絶えて、道路も寸断され、石巻圏の開業の産婦人科は、ほとんど機能しない状況にありました。妊婦さんは健診ができないので、変化がなければ病院が再開するまでは自己管理をしていただくかたちを取っていました。

当院では、やはり出血など、トラブルがある妊婦さんは紹介状を作成できないので、母子手帳を持って石巻赤十字病院か大崎、塩竈の病院を受診するように薦めて対応をしました。

震災から1週間がたつころ、赤ちゃんが元気が心配で、ヘドロの中を歩いて病院に来た妊婦さんや、病院の再開を確かめに来る家族の方が増えました。病院もライフラインが途絶えていたので、赤ちゃんの心音を聞くことぐらいしかできませんでしたが、その対応をしました。

それから、分娩を扱う診療所、個人の産婦人科は4つとも被害を受け機能しなくなりました。出産は、道路が通れるようになった3月12日からは、唯一海から離れたところにあった石巻赤十字病院に全て引き受けていただきました。

震災時の妊産婦に対する自分からの提案なのですが、1つ目、災害時には避難所で妊産婦を把握して、環境に配慮してほしいと思います。例えば、妊産婦の避難スペースの確保。同じ

場所に避難することで把握ができるし、周囲からの配慮もしやすい。また、物資の提供も受けやすいのではないかと考えます。

2つ目、妊婦さんは、健診時にセルフケア能力を高めるための声掛けを促すようにしたらよいのではないかと思います。妊婦健診のときに、セルフケアの向上を図る情報提供をすることでトラブルが防げるのではないかと考えます。

3つ目、避難所や公共の場所に出産に必要な最低限の物品の配置。また、分娩の進行している方への対処方法への学習機会をつくることです。いつ災害が起こるか分からない世の中で、地震ではなくても起こるかもしれません。避難をする方のなかには、今回のように出産になる可能性もあるかもしれません。

実際に、震災のときには、ほかの避難所でも出産がありました。本当に究極なのですが、必要最小限の物品があり、安全な場所が確保できれば出産は可能だと考えます。現に、避難所では、お産に必要な器械類は、ほとんどなかったと思います。今回の体験から最低限の衛生材料さえあれば、出産ができるのではないかと考えます。

また、避難所に必ず医療者、産婦人科スタッフがいるとは限りません。救急講習のように、行政の職員の方、産婦人科以外の医療者の方を対象にした、出産時の対処方法などを学習する機会を設けてはどうでしょうか。

4つ目、ライフラインが寸断されても、主要の病院と連絡が取れるシステムづくり。数日間、避難所の生活をしました。もちろん、そのなかには持病をお持ちの方もいて、その方への対応をする機会もありましたが、避難所には必ず医療者がいるとは限りません。ですから、避難所になるところには、ライフラインが寸断されても主要の病院と連絡が取れるシステムがあると、医療者でなくても急病人の対応の仕方などの指示がもらえ救命につながると思います。

震災から、3年7カ月がたつ石巻圏の周産期事情ですが、石巻圏の分娩施設の減少により、出産事情の悪化。震災前には、先ほどからお話があるように、石巻赤十字病院のほかに分娩を取り扱う診療所が4カ所ありました。

そのうちの2つが閉院。3年7カ月がたついまも、変わりはありません。今後も、出産施設が少なくなれば安心して妊娠生活を送ることができず、将来はお産難民が出てしまう状況に陥るのではないかと危機感を感じています。

それから、行政の方からお話がありました。それが人口の減少につながるのではないかと考えております。

妊娠中も順調に経過をして、出産も安産、産後の経過もスムーズに行くと、医療介入が少なく、残された出産施設での出産も対応可能になり、出産施設の回転もスムーズになれば多くの妊産婦さんの受け入れが可能となると考えます。

現在の石巻圏の産科事情と、現在の妊娠出産する女性を取り巻く環境を考えると、妊娠、出産に向けて、体と心づくり、セルフケアがとても重要になってくると感じています。

最後に減災教育、災害教育が大事ではないかと思います。いつ、どこで、どんな災害が起こるか分からない世の中で、一人一人が災害を減らす心がけを小さいときから教育することが大事だと思います。そして、災害の種類によって対応の仕方が異なると思いますので、小さいときから各災害時の対応の教育が必要だと思います。

そして、行政の方にはいろいろな防災マップなどが、それぞれにあると思いますが、母子、妊

娠、産婦対象の防災マップの作製をしていただくととても助かるのではないかと考えております。

以上になります。ご清聴、ありがとうございました。

報告4「妊婦だから見えたこと感じたこと・体験を伝える（1）」

川名 淳子

本日は、震災当時のお話をさせていただきたいと思います。川名淳子といいます。どうぞ、よろしく申し上げます。

2011年3月11日、あの震災が起きた日、私は出産予定日を8日後に控えた臨月の妊婦でした。34週から37週になるまで、切迫早産と避子のために入院しましたが、経過は良好でした。高齢の初産とあって心配なことは山ほどありましたが、あとは無事に生まれてくるのを待つばかりでした。そんなときの震災でした。

その日、主人は仕事だったので、自宅アパートに一人でした。夕飯の買い物にでも行こうかと思っていた矢先の大きな地震。いままで経験したことのない、大きな尋常ではない揺れでした。体を守りたくても思うようにいかず、そばにあったソファーにしがみつくのがやっとでした。大きな家具などが倒れることはなかったのですがもせずに済みましたが、足の踏み場もないほどにめちゃくちゃになった家中を転ばないように歩くのはとても大変でした。

地震のあった直後、奇跡的に1度だけ、義理の姉から電話が繋がりましたが、やはりその後通話はできませんでした。幸い、メールで主人、きょうだいたちと、取りあえず無事であることは確認でき、安心していましたが、一人で大きなおなかを抱え、どう行動すべきなのか判断はつきませんでした。

そのときは、まだ状況が把握できていなかったもので、そのうちに主人も帰ってくるだろうと安易に考えていましたが、車の中で聞いたラジオからは想像もできないようなことばかりを伝えていました。それでも、私をはじめ、同じアパートの方も中里にまで津波が来るとは全然考えていなかったのだと思います。

結局、徐々に押し寄せてきた水は車の半分が浸るまでになり、1階の自宅は浸水、私はそれまで同じアパートにもかわらず、名前も知らず、会釈ぐらいしかしていなかった棟違いの2階に住むご夫婦の部屋へ避難をさせていただけることになり、とても感謝しました。ご夫婦は、妊婦の私のことをずっと気に掛けてくれていたようで、そのことがとてもうれしかったことを覚えています。

次の日には、弟と自衛隊の方々に助けられ病院へ連れていってもらうことができました。震災翌日午前の日赤病院は、まだ静かで、産婦人科の待合室から見た病院付近の景色は、前日の震災がうそだったのではと疑いたくなるような光景だったことを、いまでもはっきり覚えています。

産婦人科には、次々と妊婦さんが運ばれてきていました。状況を聞くと涙が出てきてしまうこともありました。避難所で出産し赤ちゃんを抱いてきたお母さんを何人も見ました。そのたびに、どれだけ大変だったのだろうと、つらくなりましたが、無事に生まれてきてくれた赤ちゃんとお母さんは強いものだと思えたものです。

私も、3月20日、予定日より1日遅れで出産しました。かかりつけであった日赤病院で出産できとても安心しました。仕方のないことですが、全て、想像していたものとは程遠いものだったような気がします。

病院で出産ができないかもしれないとか、ミルクやおむつが足りないかもしれないとか、震災

前にはそんなことを想像したり、考えたりしたことは、当然ながら1度もありませんでした。

当時の私は、生まれてからでも間に合うからと言われた言葉をうのみにし、ミルクの備えが全然足りなくて、義理の妹や、友人などが、ありがたいことに必死に探してくれました。当たり前のことですが、最低限の備えは必要です。

日赤病院近くの弟の家で、停電で真っ暗な中で破水をし、懐中電灯を頼りに入院の準備をしたり、産後も3日で退院だったり、初めての出産で大変な経験をするようになってしまいました。出産に普通というものはないのかもしれませんが、いまだに普通に産みたかったなという気持ちですが、どこかに残っているのも本心です。

母子手帳の出産の状態の記録では、のらない陣痛の末に鉗子で息子を取り上げてくれた先生は東京からの応援だとおっしゃっていましたし、代わる代わる付いてくれた助産師さんは、名古屋からと秋田からの助産師さんでした。

出生届出済証明書は、退院後、3カ月避難をした主人の実家の涌谷町での証明です。その当時、石巻市役所は混乱が続いていて、出生届を出しに行った主人は窓口の人に死亡届ですかと言われたと言っていたことを思い出します。あらためて、震災のさなかの出産でした。

震災から3年7カ月。息子も3歳7か月になり、春から幼稚園へ入園することになりました。今回、このようなご縁をいただき、薄れていた記憶が、だいぶよみがえってきました。もう、あのような経験はしたくはありませんが、また、いつあるか分かりません。そのときには、安心した出産や育児ができるように、まだまだ考えていかなくてはいけないことがたくさんあるのだと思います。

ありがとうございます。

報告5「妊婦だから見えたこと感じたこと・体験を伝える（2）」

小林 真紀

初めまして、小林真紀と申します。

震災のときは、一時避難していた場所から、住んでいたマンション近くまで津波が来るのを見て、急いで高台の小学校に避難しました。4月中旬が予定日だった私は、夫の実家がある静岡県に移動してお産をしました。その、約2カ月後の6月に石巻に戻ってきて生活をしております。

現在は、3歳と10カ月の2人の息子を育てております。今日は、このような機会をいただいたので、皆さんと一緒に、ママと赤ちゃんを守るすべを考えていきたいと思います。よろしくお願ひします。

では、早速、当時を振り返ってみます。あのころ、おなかの中には上の子が入っていて9カ月でした。お産と子どもの誕生に向けて、マンションの部屋で一人、準備をしていました。そのとき、あの大きな地震が襲ってきました。2回目の地震のときには、敷き布団を頭からかぶり身を守りました。

冷蔵庫は揺れながら前進し、電球傘はいまにも落ちそうになり、テレビもつかず、これはただ事ではないと思いました。周りとのつながりも途切れ、孤立感と恐怖感が一気に襲ってきました。しかし、夫の職業上、しばらくは会えないことを覚悟し、自分がおなかの子を守るんだと、母親として気を強く持った瞬間を覚えています。

そこで、初めにしたのは、玄関やベランダから外に出るの情報収集です。外は恐ろしいくらいに静かでしたが、私を見つけた男の子が、避難した方がいいというような声を掛けてくれました。

確かに、この部屋に一人でいるのは耐えられないし、万が一体調の変化があった場合には、誰からの助けも得られないと思い、とにかく、人がいるところへ避難した方がいいと判断しました。

マンションまでの津波はまぬがれたとしても、火災が起こるかもしれないということも考えました。そこで、母子手帳をかばんに入れました。これから、石巻で健診を受けようと思っていた私には、情報提供書もあったので、それも忘れずに持ちました。そして、どこにいてもいつなのか分かるように腕時計をしました。

温かいカーディガンを着て、その上に、一番厚手のダウンコートを羽織り、帽子をかぶりました。こうした服装によって後の避難所での寒さからはだいぶしのぐことができました。こうして、部屋を出るまでの間は数分だったと思います。行動は早く、でも頭は冷静という感じで、焦るなかにも、とにかく気持ちを落ち着かせて、必要なものをパッと頭の中で考えて行動していました。

と同時に、石巻同様に海の町と言われる気仙沼市に住む両親と兄家族のことが気掛かりで、避難するまでの間に、両親へ何度も電話を掛けました。ようやくつながった1本の電話で、避難した方がよいということだけを伝えることはできましたが、それ以降はつながらず、どうしたものか不安な気持ちを抱えたまま、おなかの子と過ごすことになりました。

小学校に避難してからも、余震で大きく揺れる体育館の電球が落ちそうになっているのを見て、瞬時に逃げられるような体勢を取り続けました。そうこうしていると、「小さい子どもがいる方を優先に教室に行きます」とアナウンスが流れました。

そこで、私は「自分は妊婦なんですけれども、教室に行った方がいいのか、どちらの環境がいいのか」尋ねに行きました。教室の方が暖かいだろうということで、移動することにしたのですが、その際に、子どもを持つ女性が、私の足元を気に掛けて手を差し伸べてくださったり、「赤ちゃんがいる教室の方がおなかの子も安心するでしょうから」と声を掛けてくださいました。

そうした心遣いは、危機的な状況のなかでも、とても温かく感じました。小学1年生の教室は、赤ちゃんと、小さい子どもがいる家族でいっぱいになっていました。

学校に残っていたお湯は、ミルクが必要な子に優先的に使われました。そして、私は小さい椅子に腰掛けながら、このままの体勢で夜を明かしたのでは、おなかの子によくないと思いました。だから、少しでも横になれる場所を探しに行こうと判断しました。職員室に行き、「妊婦なんですけれども、毛布はありませんか」と尋ねると、「掛け布団はないけれども」と、1つのベッドを案内してくださいました。それは保健室のベッドでした。その、1つのベッドに同じマンションから避難してきた3カ月の妊婦と一緒に横になりました。

夜中には、私たちを気に掛けてくださった方は、何か月なのかということと名前を確認してくださいました。そして、「掛けないよりいいと思って」とカーテンと男性用のジャンパーを持ってきてくださり、それを、私たちは掛け布団代わりにしました。これが避難所の初日です。後に分かりましたが、この方は、養護の先生でした。

それから、食べ物ですが、次の日だったか、避難所に食材を持って作りに来てくださった方がいらしたので、私たちも並んでいましたが、何せ厳しい状況だったので、水を持ってきてくれた方限定ということでした。

空の鍋などを持って遠くまで水をもらいに行く方々の姿もありましたが、妊婦の私にはとてもできませんでした。皆さんの様子を見ていたら、とても、そのときは妊婦であるということを出せませんでした。

自分で探しに行くしかないと思い、外に出ました。歩いていたら、ちょうど、豆腐を車で運ぼうとしているところに会ったので、「妊婦なんですけれども、何か食べるものがないかと思って、その豆腐が行くところに行きたいので、行く場所を教えてください」というようなことを尋ねると、ありがたいことに、その場で快く分けてくださいました。それを、何日分にも分けて、一緒にいた妊婦の方と食べました。

また、津波の被害をまぬがれたスーパーに並んで、残りのカップラーメンとジュースも買いました。それまで控えてきたものでしたが、とにかく、いまはあるものをいただく、口にできるだけでもありがたいという気持ちに切り替えました。

その後も、行動できる範囲で行動をしながら安静を保ち、精神的な安定を保てるようにも努めました。保健室は、緊急性の高い方が使えるように空けるため、私たちも教室に戻りました。

まず、毛布をもらいに避難所の本部へ行きましたが、初めは「ない」と断られました。でも、妊婦と聞いていた別の方がすぐに用意するように指示をしてくださいました。移った教室では、子連れの方が私たちを気遣ってくださり、おなかの痛いときには、定期的なのか、そうではないのかと声を掛けてくださいました。お産を経験したことのない私にとっては、とても心強いものでした。

携帯がつながりはじめた15日ごろに恩師へ、両親と兄家族のことが心配であることを涙ながらに話したときに、それを受け止めてくださいましたが、こう言われました。「あなたのおな

かの中には赤ちゃんがいるのよ」と。つまり、それは、両親を心配する気持ちも分かるけれども、守るべき子どもがいるのよ、しっかりしなさいという一喝に聞こえました。そうだと思います。

確かにそうだけれども、生まれてくるのをとても楽しみにしていたのにと、両親のことを思うと、つらく悲しい気持ちがこみ上げてきて、安否確認が取れない現状に不安で胸が張り裂けそうになっていたのも正直なところでした。

また連絡がとれた、夫からも、「私と、おなかの子と、産後を考えてほしい、元気な赤ちゃんを産むんだよ」と励まされていたので、いまは、やはり赤ちゃんを大事にということを再認識していきました。

大震災のときには、赤ちゃんのことだけではなく、身内の安否などを心配する気持ちがどっと押し寄せてきます。精神面の助け合い、支え合いは、とても大切だと思いました。

移動してからも、全面的にサポートをしていただき、出産を迎えました。幸い、無事だった両親も、周りからの支援により、駆けつけてくれることができ、赤ちゃんを見ることができました。

うれしく思っていた私でしたが、お産をした病院の助産師さんから、「小林さんは、いつも、そう、笑顔がないの」と言われ、自覚がない私は、とても驚きました。でも、それを聞いて私は、震災と、初めてのお産と、初めてのママという経験と、初めての赤ちゃんのことで心労が重なり笑顔が消えていたのだと気が付きました。

石巻に戻ってきてからも、母乳のことや、子育てのこと、放射性物質での飲食のことなど、気になることがいっぱい、とてもつらかったです。

そんなときは、訪問してくれた助産師さんの活動などに助けられました。自ら動くことや話すことはエネルギーがあるので、受け入れ幅を持たせてくれたり、お話しやすい機会があると、とても助かります。ママが回復したり、落ち着くことは赤ちゃんを助けることにもつながります。

まとめますと、それまでの赤ちゃん中心の生活が、一瞬にして震災という恐怖の渦に巻き込まれて一変しました。赤ちゃんや自分のことだけを考えていけばよい状況ではなく、何度も心配事が襲ってきて、精神的にとってもつらかったです。

しかし、そのようななかでも母親として、赤ちゃんを守るために自ら行動しました。避難中は、妊婦と告げずにいたのでは得られなかったことが多くあったと思います。自分から動くことも、赤ちゃんを守るために、ときには必要だと思います。

また、妊婦同士だと行動しやすく援助もまとまって得やすいと思います。気にかけてくださった方や、経験者の方の助言はとても心強いものでした。

そして、安心する場所に移ってからは、それまでの気を張り詰めながら赤ちゃんを守ろうとする気持ちには、少しはゆとりができましたが、ただでさえ命懸けのお産であるのに加えて、震災での精神的な負担、お産の環境や状況が理想とは異なるために、心身ともに負担も増えることを思うと、それだけ支援があると助かると思います。

それは、手続きに関しても言えると思います。普通の里帰り出産のような、ほかの地でのお産とは、先ほど話したようなことから私は状況が違うと思うので、児童手当など、手続きの呼び掛けの強化や、市町村同士の連携があるとすごく助かると思います。どうか、ママやパパ自身も忘れずに、手続き関係をしていただきたいと、経験から切に思います。

今日、お話ししたことは、自分から進んで行動して得られたこともあります。ほかの妊婦の方が、どのように過ごしていたかは分からなかったのですが、このような話を聞いてどのように思われ

るのが怖かったのと、産気づいた方が保健室に来たときに、進んでベッドを譲ってあげられなかったという心の引っ掛かりもあって、これまで、このようなお話は控えてきました。でも、お役に立てることがあればと、この機にお話し致しました。

ご清聴、ありがとうございました。

フロア討議

○田間 こんにちは。大阪からやってまいりました田間泰子です、よろしくお願いします。

今日の主催者と共催者、あとで最後のあいさつもします山地も、田間も、ほかにも何人が関西から来ています。阪神・淡路大震災を大きな経験として持っていて、もう20年近く前になるんですけど、そのとき以降、何かできることをとずっと考えてきたという部分がありました。

今回、私自身はベビースマイル石巻との出会いがありましたので、このようなシンポジウムを多くの方々の協力と、石巻市の大きな協力を得て開催することができて感謝しております。ありがとうございます。

私は、とにかく、ママと赤ちゃんが生きていける社会でないと未来はないという信念でありますので、そういう意味でも防災復興に、ぜひ、ママと赤ちゃんの視点を生かしたまちづくりが全国どこでも、世界中でも、できるようになればいいなと思って取り組んでおります。

では早速、後半、残り少ない30分ほどになりますが、皆さんとの話し合いということを始めさせていただきます。

お手元資料について、最初に可会が確認をさせていただいたとは思うのですが、足りなかった部分もございますので、もう一度、私から説明をさせていただきます。

最初に、ベビースマイル石巻のご紹介パンフレットが入っていたと思います。

次に、私が素晴らしいなと思いましたが、ベビースマイルさんが助成金を取られて、『お産と子育てリソースマップ』という冊子をつくっておられます。ここに石巻を中心とした行政の子育て関係サービス、いろいろな市民のグループの方々、それから産科婦人科などの専門職の取り組み、遊び場マップ、そして、一番のベビースマイルの特徴だと思いますけれども、真ん中辺りに「伝えていきたい子育て家庭の防災」ということで、先輩ママたちからの簡単なアドバイスが載っております。

ベビースマイルさんは、ちょうどこういうかたちで妊産婦支援プラス防災、減災、復興の支援を、絶対に忘れないという活動をなさっていて、今日のシンポジウムにもつながっています。ぜひホームページも併せてご覧いただいて、また、冊子もつくっておられるので、見ていただいたらと思っております。

次に、日赤の真坂さんがお話しなされたものに関係するのは、「きずなメール石巻版」です。先ほど、真坂さんのご報告のときに、「きずなメール」というのが最後の方にパワーポイントで出ていたんですけど、そのご案内がこれです。

今日も、このプロジェクトのNPOの松本さんがおみえだと思います。また、あとで何か一言いただければと思いますけれども、平時からつながっておくということが大事で、とにかく今はネット時代です。阪神・淡路と何が違うかといと、ネットがあるということなので、それを大いに活かした妊婦支援ということで、活用をお願いしたいと思って資料を入れました。

その次に、2番目の保健師の水沼さんが入れてくださった資料は、緑の災害情報テレフォンサービス、メール配信サービスの部分と、それから、メタボ・アンド・メンタルチェックです。こういうところで、行政からの資料もいただいております。

また、石巻市役所のホームページから、マップやら、情報やら、いろいろと見ることもできますので、そちらも確認していただけたらと思います。

その次に、小田嶋さんのお話に関係しているものが、『減災対策ボンディングブック』こちらは、小田嶋さんが加入しておられるNPO作成のもので。これを私が、ぜひ入れさせていただきたいと思ったのは、赤ちゃんがいる家庭だけではなくて、お年寄りもおられるとか、ペットもいるとか、いろいろなご家庭のタイプを全部まとめて1冊にしておられるんですね。

このイベントは、赤ちゃんがいるときの防災減災・復興がテーマですが、赤ちゃんがいるご家庭だけではなくて、ほかにペットとかお年寄りとか、いろいろな方がおられる家庭が当たり前だと思います。そういう意味で、国際ボンディング協会の『減災対策ボンディングブック』は素晴らしいので、ぜひお役に立てばと思って資料に入れさせていただきました。

あと、もう一つは、『家族のやくそく』ということで、chibitoさん作成のグッズです。これは、荒木さんが説明していただけますか。

○荒木 東京で、子育てグッズを開発している企業さんとお話しをしていたなかで、「役立つ防災グッズって何だろうね」ということで、いろいろな案をお母さんたちから出し合っていたのです。

これは、商品とかにはならないのですが、災害時の避難のしかたについては、口約束をしている家庭がすごく多くて、本当に、また災害、となったときに相手を信じられるのかなど。あそこには逃げようねと言っているけれども、でも、その話の前後の流れがあったりすると、本当にそこに行けるかなどという疑心暗鬼の部分が、ものすごく不安になるので、やはり紙に落として持っているという、そのシンプルなことをした方が絶対にいいよね、ということで、このカードをつくっていただいて、今回、配布しています。書くのには夫婦間の協力が必要です。一方的に書いてもしょうがないので、やはり家族で。私も書こうと思ったら、やっぱりみんなで考えないと書けないです。なので、ぜひこの機会に書いてもらいたいと思います。

○田間 ありがとうございます。

あと、もう一つ資料として入っているものとして、『助産師が伝える災害時の知恵袋』の一部コピーが入っております。ご後援いただいた宮城県助産師会の後藤会長に来ていただいていますので、あとでご発言をお願いしたいですが、その組織も加入しております日本助産師会が、災害に関して発行している冊子の一部をコピーさせていただきました。裏に、スマホですぐ使えるコードが載っておりまして、ここから妊婦の方とかは、すぐ相談を普段からしておける、情報が得られるということです。こういうことも、いろいろと使っていたらなと思い、専門職からの大切な情報提供ですので、入れさせていただきます。

では、お話に移りたいと思います。

最初に、なぜ今日シンポジウムをしたかという日程設定の問題なのですが、先ほど、水沼さんもおっしゃいましたが、一週間前に石巻市の総合防災訓練がございました。

このなかで、石巻市在住の方で、ご参加いただいた方はおられますでしょうか。どうでしょうか。挙手をありがとうございます。石巻市ではない方もおられるかもしれませんが。

今日は、その訓練からほぼ一週間後ということで、ある意味、市の取り組みとリアルなかたちで繋がっています。みなさんのお手元に、あとで記入していただきたい参加者アンケートというのがございますけれども、その参加者アンケートでは、「防災訓練に参加しましたか」というのを、市民の方々に聞いております。

今日、お話が出てきましたけれども、3年何カ月かたって、やっとお話しいただいた方もたく

さんおられます。でも、やはり、いま平時に戻っている部分があるなかで、けれども復興が大事なまだからこそ、できること、しなければならないこと、考えなければならないことというのが、たくさんあると思います。

それぞれ、ご提案もいただいたのですが、あとでまた最後に皆さんに一言ずついただけたらと思いますので、もう一言、最後に言っていきたいということを考えておいていただいでよろしいでしょうか。それでは、フロアの方にもマイクを回すようなかたちで始めていきたいと思います。

●

先ほど、やっと到着なさいました、お仕事、お疲れさまです。石巻市の危機対策課の林さんをご紹介がてら。今日は、来ていただいてありがとうございます。

今日、母子避難所とか、さまざまな備蓄はどうなるのかとか、いろいろなことが出てきました。危機対策課として、いまの石巻市のとりくみ、特に妊産婦さんに関する取り組みというのは、どんな感じか教えていただければと思います。いかがでしょうか。

○林 大変遅くなりまして、申し訳ございませんでした。危機対策課の林と申します。妊産婦さん方の避難所の関係についてということですね。

皆さん、体の不自由な方々、要援護者の方々の避難所というものが、どうしても必要になってきます。いま石巻市内でも230強の避難所であるとか、避難場所というものがあります。この近くだと、向陽小学校もそうですし、蛇田の公民館であるとか、そういったところが避難所になっています。

要援護者の方々の避難場所、避難所については、福祉総務の方と連携をして、介護施設であるとか、そういったところと協定を結んでいくといったかたちで取り組んでいます。すでに協定を結んでいるところもあります。お子さん連れで一時避難はしたけれども、皆さんと生活をするのは大変だという場合は、そこからトリアージして、福祉避難所的な場所に移っていただくというような考えでいます。

3・11のときも、そのようなかたちで対応をさせていただきました。皆さんもなかなかインターネットとかを見られる環境にはないということも、よく承知していますので、その辺は媒体をうまく利用して、皆さんに「こういう避難所があるよ」ということは、今後、お伝えしていきたいと思います。

○田間 ありがとうございます。それでは、今日のお話は、石巻市からもご参加いただいていますし、それ以外のお話もいろいろとありましたので、もし、フロアの皆さんからも、ここでぜひ発言をしたい、これが読みたい、これが言いたいということがありましたら、マイクをお返し致します。

皆さま、挙手していただいたらよろしいのですが、どなたか、いかがでしょうか。

○金 神戸の緊急支援のために市民が立ち上げました、コミュニティーラジオ局、「FMわいわい」の金と申します。よろしくお願致します。

一つ、すごいなと思ったのは、先ほど、田間先生もおっしゃいましたけれども、メールがあるとか、携帯が非常時にツールとして使えるというのは、これからの時代にずいぶん変わると思います。神戸のときには、母子とか、妊婦とか、まったくそういうところは考えておりませんでした。

た。

これからは、いろいろなお話のなかで出てきましたように、「子どもこそ未来」です。未来のまちづくりのためには、妊婦とか、子どもを育てるという人たちのためのこと、もちろん高齢者のため、いろいろなことがあるとは思いますが、そういうところを中心に考えてまちづくりを考えていくというのは、大変重要だと思いました。

今後の制度設計とか、そういったところも共に、こういう提案があるとか、あるいは行政の方もいっちゃっているの、こういうふうにしていきたいと思っているというのは、反対にこちらが教えてほしいところだと思いました。ありがとうございます。

○田岡 ありがとうございます。ほかに、どなたがいっちゃいますか。

○荒木 私が冒頭に少し言い忘れていたことがあるのですが、やはり、この土地で3年前はお母さんではなかったけれども、いまお母さんになっている方がたくさん増えています。

被災地でお母さんという、本当にひとくくりになってしまうので、みんなが震災を体験したお母さんという感じで見られがちですが、新たにお子さんが生まれた方、もしくは1人から、また2人に増えた方、3人になった方とたくさんいらっしゃると思うのですが、その状況状況で、やはり災害に対しての備えがまったく変わってきます。

また、体験をしていない人にとっては、どうすればいいのかなというのが本当にあります。先ほどもお話にあった、防災グッズをつくらうというときにも、「え、何が必要かまったく分かりません」というところからはじまりました。

進むだけではなくて、これは大変だと、きちんと振り返りをしていけないと、お母さんたち、子どもたちは、またこの土地で、この先苦労するなと思ったので、今回の会になったわけです。

なので、もし、今日来てくれたお母さんたち、子どもの声が聞こえたりして、ちょっとそわそわしながら、でも大事だなと思って来てくれていると思いますので、何かあれば、どうですか、活動とかにも参加をしてくれていたお母さんもいたので、すみません、会場を歩いちゃいます。たぶん、ご本人は「当てないで」と思っていると思いますけど。

○佐藤裕香 中里に住んでおります、佐藤裕香と申します。よろしく申し上げます。

当時、私は、9カ月になる男の子がいました。中里地区は、1階床上浸水で、外には出られない状態で、何とか全然知らない方にボートに乗せていただいて、土手の上まで上げていただいたんですけど、そのときに、中里の避難所としてあったのが中学校と小学校があって、中学校の方に行きましたら、まず何も無い、水もない、ミルクもない、毛布もない。

市の方が、町の方が分からないのですが、状況を確認されている女性の方に、「すみません。粉ミルクはあるんですけど、水はないですか」と話したら、「ないです」ということで、「お湯を沸かせるやかんとガスコンロはあります。ミルクと水はないので、持っていそうなお母さんに自分で声を掛けてもらってください」と言われました。見回してみても、ちょっといらっしやなくて、それで、ここにいるのはやめようという話になって、もう一方の小学校の方に行くことにしました。

小学校に行く前に、赤ちゃんを抱っこしていたので近所の方に声を掛けていただいて、「そっちの小学校には、ミルクもお湯もあるみたいだよ、そっちに行ってみなさい」と言われて、それでそちらの方に行くと、状況を把握している方に声を掛けると「ありますよ」と言われて、哺乳瓶はありますかと言うと、「哺乳瓶はあります」。そこで初めてミルクをつくって息子に飲ませる

ことができたという状況がありました。

そのときに、ちょっと思ったのが、いま3年7カ月ぐらいたっているんですけども、各避難所のミルクとか、水とか、おむつとかの備蓄の状況というものを、いまの時点でも把握しきれていないので、それを教えていただきたいということです。

あとは、その小学校に避難したときに、3月11日は雪が降ってすごく寒かったんですが、生後間もない赤ちゃんを廊下でおばあちゃんが抱っこしていて、「寒くないように、寒くないように」と言っていたんです。

先ほど、水沼さんからもお話があったように、母子の避難所というものが私としては必要なのではないかと切に思っていますので、その辺のご検討をいただけると、今後、もし同じような災害があったときにお母さんたちが路頭に迷わないで安心して過ごせる避難所というものが出来るのではないかと思えます。

○荒木 ありがとうございます。勇気を出して、お話をしていただいたと思うのですが、今日、お願いした川名さんと小林さんも、私たちの体験というのは、どちらかというと思われていたのではないかとおっしゃいます。人前で話すようなことはなくて、もっと大変な思いをされた方がいるのに、自分たちでいいのだろうかとか初めは言われました。でも、そのひどい、ひどくないという差は分からなくて、やはり、皆さん頑張っておられたので、自信を持って体験を伝えてくださいということをお願いしました。ありがとうございます。

○田間 ありがとうございます。早速、いま質問が出ていましたので、石巻市の方に回答をお願いします。備蓄は、どうなるのでしょうか。

○青木 福祉総務課の青木と申します。いまお話がありました。ミルク、水ということですが、水は避難所には配置されておりますが、ミルクは賞味期限の関係がありまして、震災当時は備蓄等をされたのですが、その後の補給というものは、なかなか、難しい状況で、それに向けてどうしていくかということを検討しているところでございます。

あと、母子避難所という考え方なのですが、いまのところ市で考えているのは、自宅から一時避難所への避難ということです。その避難所に来ていただければ、市として避難者の確認ができますので、そうしたなかで、先ほどから出ているような、トリアージといった、避難をされた方の状況を確認して、必要に応じて福祉避難所、または病院への搬送ということを考えているというのが、いまの状況でございます。

○田間 はい。ありがとうございます。それでは、ほかにフロアからご質問はありますか。

○千葉幸子（井内保育所所長） こんにちは。私も市の職員なので提案をさせていただきたいと思えます。震災のときは、流出してしまった門脇保育所の所長をしていました。数々の避難訓練を経験していたので、高台に逃げろということで、石巻保育所に子ども達と、職員とで避難をしました。

その時に、ラジオ石巻さんのメールを一生懸命に記憶して、メールを送ったけれども駄目で、また送り直してということで、ラジオ石巻さんに、門脇保育所の子ども達と職員は石巻保育所に避難しましたということを読み上げていただきました。

ほっとしたのもつかの間で、火事が迫ってきたので石巻高校に避難しようということで石巻高校に行きました。そのときに、石巻保育所も、門脇保育所も15人位の子どもの達がいたのですが、先生達との信頼関係もできていたので、少しも泣かずに過ごし、一番最後のお子さんが帰っ

たのが5日目でした。

そのときに避難してきた方が、本当に乳飲み子で、抱っこをしても赤ちゃんが不安がって泣くのですが、門脇郵便局のグループにその赤ちゃんがいて、体育館のように広いトレーニングルームにいたのですが、そのときの門脇郵便局の局長さんが、たまたま私の教え子だったものだから、「所長先生、手伝って！」と言われて、抱っこをすると泣き止んでずっと寝るので、それでお渡しすると、また泣くという感じでした。

その時、このお母さんと子どもはかわいそうだなと思いました。お母さんが、知らない人に子どもを抱っこしてもらって、申し訳ないというかたちで、廊下をうろろろしていたのが忘れられませんでした。

それで、下の状況がどうなっているかは分からなかったのですが、次の日以前谷地に実家があるからということで、赤ちゃんを抱っこして歩いて帰られました。「行くところまで行って、無理だったら戻っておいでね」と言ったのですが、戻ってこなかったので、前谷地に無事に着いたのではないかと思います。

いま市の方が来ているので、お願いしたいことがあります。保育所に、ぜひミルクとか、子どもとお母さん達が来たときに安心できるものを、保育所の予算では絶対に買えないので、市の予算として、水を置いておくとか、あとはガスコンロとかは保育所の方にあるので、0歳児施設であれば古いミルクを取っておかなくても済むので、民間でも何でも0歳児施設、保育所の方にそういうものを備蓄してもらって、お母さん達も、すごく楽なのではないかなと思います。

いま石巻では、石巻保育所とか、ふたば保育所とか、井内保育所とか、安心な保育所だけが残っている状態なので、お母さん達からも、そういうところに行こうという気持ちを持っていただきたいです。

私は来年の3月で辞めてしまうのですが、所長会議とか、市との会議のときに、保育所は、そういう役割も担わなくてはいけないのではないかと話をしておきますので、どうしようもないときには、大きいところに行くよりは、たぶん保育所は、ほっとできると思います。

それで、「もし福井公民館が一般の方の避難所になったら、赤ちゃんは保育所に連れてこようよ」と井内保育所では言っています。そういう気持ちを、ほかの保育所等にも伝えておきます。市の方でも保育所に予算を取っていただいて備蓄をしていただければ、妊婦さんとか赤ちゃんを連れての方は、子どものおもちもあるし、トイレも小っちゃくてかわいいし、安心できるのではないかなと思います。

私は、今日は、そのために来たのかなと、思ったのですけれども。子育て支援課の方がどうしても来られないということで、代表で来てくださいと言われたので、門脇保育所の状況と、ラジオというのがすごく大切なことと、せっかくの機会なので、どうぞ保育所を利用してほしいということをお話して、すみません、長くなってしまいました。

○田間 ありがとうございます。庁内でお伝えいただければと思います。

○青木 いま保育所の所長さんから、ありがたいお話をいただきましたけれども、今回の災害を受けまして、市の方で、災害時、要支援者、要保護者の方々について、どのようなかたちで避難をしていくのか、その在り方というものを、内部検証ということを昨年からしております。

そのなかには、子育て支援課も入っておりますので、どのような対象者を、どのようなかたちで支援していくのか、どのようなかたちで守っていけるのかということを検討しております。

保育所長さんから、このようなご意見があったということについて、例えば保育所が災害時における地域の方々を救える施設として使えるのかどうかということも検討に入れていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

○司会 ありがとうございます。では、もうおひとかた、手を挙げていただいております。お願いします。

○久野 健康推進課の久野です。今日、お話を日赤の真坂さまのお話のように、やはり3年半ということがあって初めて話せるようになったんだという時間の流れを感じました。荒木さんが言ったように、子どもたちは大きくなっていて、今月の3歳児健診に来る子たちが震災で生まれた子たちなのです。これから健診に来る子たちは、もう震災を知らなくて、お母さんの話のなかで感じている子たちが来るんだという、その時間の流れを感じながら伺っていました。

それとともに、行政の者はたくさん来ているのですが、行政の難しさ、荒木さんがおっしゃった組織の難しさというところで、情報もなかなか共有されないなと思っていたのは、ミルクの備蓄の問題です。

備蓄品のことでNPOのベビースマイルに、何が最低限必要ですかということを随分前にご相談申し上げていて、その情報を担当課の方にはお伝えしております。それらをもとに備蓄はしていると思います。

ただ、すみません、私どもの方でも、どこに、どれぐらい備蓄しているかというところは把握していないので、これから将来の問題としては、その辺が、ちゃんと情報共有できて、職員が分かるなり、皆さんが分かるというところが必要なところなのだなと思いました。

そのときに、小田嶋さんたちが言っていたように、哺乳瓶の備蓄は確かにありません。ミルクにして、コップで最低限飲ませていただいて、できるだけお母さんたちが母乳を飲ませてあげられるのであれば、母乳を上げるのがお母さんもお子さんも安定するというところで、お話を承りました。

最低限のところで、ミルクの方はちょっとは用意をしていたと記憶しております。補足でお伝えさせていただきます。

○田間 ありがとうございます。それでは、もうおひとかた、手を挙げてくださいましたので、お願い致します。

○林 私は、今日は利府から来ました。林といいます。実は荒木代表とは、ここにある『減災絵本リオン』という絵本でお付き合いが始まりました。

小田嶋さまも、減災、防災教育の必要性を言っていますけれども、私の方では、震災以降、特に子どもたちに、リアルな、怖がらない減災教育といえますか、3歳から小学6年生ぐらいの年齢を対象とした絵本の読み聞かせとか、紙芝居とか、あるいは簡単な水とか土の勉強というか、そういうミニ実践をとおしてやっております。今日は、ママさんというテーマを見て、私は遠慮をして来たんですけども、雰囲気を見て、これはうちの団体のPRになってしまうかも分からないのですけれども、皆さんに、うちの団体の活動も少し知ってほしくてしゃべってしまいました。保育所とか、幼稚園とか、児童館とか、そういうところで絵本の読み聞かせとか、紙芝居とか、そういうのをやってほしいということがあれば、ひと声掛けていただければ幸いです。どうもすみません、ありがとうございます。

○田間 はい。ありがとうございます。

○ヨンドウ 東京から来ました。ヨンドウといいます。

ミルクのお話は、ちょっと出ているのですが、離乳食関係というのは、どういう状況なのでしょう。災害時から、何だろう、実際にものが流通する、その間の対応とかは、実際には、避難中はどうであったのかということ、少しお聞きできればと思ったのですが。

○田間 はい、ご質問、ありがとうございました。石巻市役所の方に、いまの状況を少しお話しいただければ。

○林 いまの備蓄品の状況でございますが、皆さんの近くに学校が何かしらあると思うのですが、学校の敷地の中にプレハブの倉庫をご覧になったことがありますでしょうか。日赤さんで準備をしていただいた倉庫があるのですが、そこに小中学校に限らせていただいて、約500食程度ぐらゐの備蓄品を、それぞれに配備させていただいています。水であったり、ビスケットであったり、あとは発電機だとか、ガソリンだとか、暖房器具です。そういったものは各学校に配備しております。

ですので、そういった、お子さんが食べるものとか、あとは介護的なのについては、今後は福祉の方とどれくらい要援護者の方が、それぞれの地域にいてといったところで、数については健康推進課、福祉総務と、今後、間違いなく検討して次の災害に備えるという体勢を取ってきたいというふうに考えております。

小中学校、高校といったところに限られてしまいますけれども、備蓄品は用意してございますので、皆さんの持ち出し品的な、例えばリュックサックの中に情報を得るための手回しのラジオとか、懐中電灯とかが一掃になったものもあります。

あとは、普段ご家族で飲んでいる方がいらっしゃれば薬とか、そういったものも、常に準備ができていて、先ほどもお話がありましたけれども、どこに避難をしたらいいかと、家族で紙に書いて決めておきましょうということもいいです。

日中に震災して、仕事先や自宅でバラバラになっても、最後はどこで小学校で会いましょうという約束をしていけば、3.11のときのように、皆さんが個別に避難所を回ることもなくて済むのかなと思いますので、その辺で、普段から皆さんで被災の意識を持って取り組んでいただければと思います。以上です。

○田間 防災教育をしっかりしてくださって、ありがとうございます。

ちょっと、時間が押してしまっていて、申し訳ありません。最後に、宮城県助産師会の後藤先生、一言お願いします。

○後藤 宮城県助産師会の後藤といいます。この会を後援させていただきましたのかがいりました。

本当に貴重な体験をお伺いし、あらためてあのときのことを思い出しました。私たち宮城県助産師会は支援物資をたくさんいただいて、皆さんのところにお届けしたかったのですが、交通手段がなかったということがあり、なかなか直接お手渡しはできなくて、委員とか会員の方に渡して、そこから、そこにいらしたお母さん方に渡していただくという流れで一つ支援しました。

それから、もう一つは、助産所と石巻のグランドホテルのご協力を得まして、産後のお母さんと赤ちゃんの預かり事業というものをやりました。ただ、石巻のグランドホテルも被災しましたので、その改修工事が終わるまで、ちょっと間があったのですが、その改修を待ちながら、産

後のお母さん方をお引き取りしまして、近くの助産師が、朝な夕な訪問をして、そしてお母さん方のフォローをさせていただいて、そして74組の母子をお預かりしたのですけれども、石巻地区はそう多くはなかったです。11組でした。

あとは、女川とか、南三陸とか、沿岸部の各市町村の方に利用していただいたのですが、そこで反省をしたのは、母子だけの預かりでは駄目なんです、『家族全部をひっくめて預かりますよ』としないと、家族は離れ離れなので、どうせ面倒を見るのだったら、上のお子さんも、それからご主人も見ますよというふうにすると、もっともっと支援を受けられる方がいるのかなということ、とても反省しております。

それから、広報の手段がなかったので、やはりFM局とかいろいろなところを利用して、そういうものがありますよとPRをもっとできたらよかったなというのが反省なんです、ですから、その地域との普段からの連携をとることによって、いざというときにつながってくるかなということで、今回の企画は、とても有意義だったなと思っています。とても、よかったと思います。どうも、今日は、参加させていただいて、ありがとうございます。

○田間 ありがとうございます。

急がせて申し訳ありません。それでは、先ほど、ちょっとお願いをしておりました最後に一言アピールをマイクを回しますので、真坂さんから始めていただいて締めに入りたいと思います。よろしくをお願いします。

○真坂 ありがとうございます。

最後の一言ということなのですが、今日、ここにいらっしゃっている方々は、おそらくすごく普段から防災などへの意識が高い方なのではないかなと思います。

今日は、持ち出しとか、避難道とかというお話もさせていただいたのですが、まずは、身の安全を一番考えて、今回の震災でも、ものを取りに戻って被害に遭われたという方も数多くいらしたと聞いておりますので、まずは身の安全ということを考えて避難行動を取ってもらえたらいいのかなと思います。

それに、あとは簡単に持ち出せるように普段から備えるということで身を守っていただけたらいいのではないかなと思います。今日は、ありがとうございます。

○水沼 今日、ありがとうございます。私は、市の取り組みというところでお話をしたのですが、先ほども、市の職員がたくさん来ていて、市の方でも本当に分からない部分だとか、縦割りだということがすごくあったので、今日、この会のおかげでほかの方々の関わりができたので、これからまずは市から、それからあとは、ほかの方々の心強いご協力を、これからもいただきたいなということを感じました。一緒に考えていただければというふうに思いました。これからも、よろしくをお願いします。ありがとうございます。

○小田嶋 お産のことに特化しますが、本当にお産施設が少ない状態です。お母さん方に自分たちの健康を守ってほしいということで、今日はお話をさせていただきました。

お産難民で将来、この石巻はどうなるのかなという、すごい危機感を持っています。いまでも人口は減っていると思いますが、産むところがなくなれば、よそに行ってしまう、ここは過疎のまらになってしまうのではないかなということを感じます。

現在も、産婦人科は3施設しかありません。どこも限界ぎりぎりで稼働していると思います。このことを切実に訴えるとともに、お母さんたちに、セルフケアの向上を図っていただければと

思います。現在の産科の現状を分かっていたらなと思います、今日はお話をしました。本当に、ありがとうございました。

○川名 先ほどの防災訓練の話なのですが、回覧板でそれを見たときに、一応受けておいた方がいいのだろうと携帯で内容を取っておいたのですが、3歳7カ月の騒がしい子どもを連れて行く自信がなく、結局行かないでしまいました。

幼稚園で、昨日、防火訓練というのをきて、いろいろと話しをしてくれて、連れて行けばよかったのかなと思いました。経験は、無駄にはならないと思うので、今度は子どもを連れて逃げなくてはいけないことを自分も実感しましたので、次は絶対に受けます。ありがとうございます。

○小林 私が、まず思ったのが、支援を受けやすい力を、個人でも、地域でも高めていけたらいいのかなと思いました。

私が避難をしたところでは、教室に小さいお子さんなどが集まって、当時聞いた話ではそこだけは暖房も入れてくれてという環境をつくっていただいたみたいなので、すごくよかったのではないかなと思っています。

こちらの避難所では受けられなかったけれども、別の避難所では受けられなかったということがないように、そういったことが避難所にいけば受けられるんだということが前もって分かっていたら、妊婦さんの方も少しは安心すると思います。

そういう支援を受けやすい環境づくりというものを、妊婦がどこにいて、誰がそこに行けば支援を受けやすいのか、支援をしたいという方もたくさんいらっしゃると思うので、そういった方がどこに行けば、そういった方々を助けられるのかというのが前もって分かるようなマニュアルですか、そういうものがあればいいのかなと思いました。

そして、避難した妊婦さんも、自分の力を信じて、自分の力を十分に引き出していただいて、こちらは妊婦ですか、ラジオなどを使って自分はここにいますよとか、そういうアピールをしていただけたらいいのではないかなと思いました。

あとは、時間の経過とともに支援もたくさん出てくると思うので、どうぞ、怖がらず、妊婦さんとか、お母さん方、お父さん方が遠慮せずに、その支援を受けてよい、頼っていいんだよというふうにお話しをしたいなと思いました。ありがとうございました。

○田間 ありがとうございます。最初は、私は配慮ばかりを考えていましたけれども、最後に、ママと赤ちゃんの力というものもすごく思います。生まれてくる力も含めて、力があると思いますので、その力をみんなで信じて支援し合うという関係を、平時からつくっていただければいいと思います。

では、これで終了させていただきます。

○荒木 私たちベビースマイル石巻は、母子支援というのが緊急直後になかなか始まらなかったこともあり、それで当事者が立ち上がったのですが、それを大きくバックアップしてくれたのがやはり外部からの支援でした。

今日は、その支援をしてくださったアメリカさんが来ているので、紹介をさせていただきます。ありがとうございます。では、山地先生のお話になります。

閉会挨拶

日本学術振興会科研費『復興・防災まちづくりとジェンダー』
研究代表者 山地 久美子

素晴らしい会の開催、ありがとうございました。私は神戸から参りました。本日は石巻という場所で「ママと赤ちゃんの復興まちづくり in 石巻」に多くの方に参加いただき、いろいろなご意見をいただくことができました。

小林さんのお話を聞く中で、「受援力」が重要だと思いました。いかに「支援を受ける力」を持つか。日本では皆、支援力はあるのですが、受援力が弱いので、その力を付けていくことが助け合いにつながるのではないかとということです。

あともう一つ、お話の中で「3年半」という言葉が繰り返して出てきました。私は2011年7月から石巻に何回も何っています。昨日も夜に町を歩きながら「ああ、ここのお店が開いた」と、当時との違いを見ていました。『石巻日日新聞』も Facebook で毎日見えています。『河北新報』も毎日見て、石巻の「い」の字を見ない日はありません。皆さんがどうされているのかと、見続けて、本日、3年半の皆さんの毎日を聞く中で思ったのは、「被災地責任」という言葉です。

皆さんは被災者だと思います。でも、この被災経験を、次の災害へどうつなげて、自分たちの災害に備えるとともに、さっき荒木さんが「世界」にとおっしゃいましたが、世界各地で起こっている災害被災地にどのように、この経験をつなげて、よりよい社会をつくるかということが被災地の責任だと思います。

阪神・淡路大震災の被災地も「20年」と言いながら、今も毎日を過ごしています。それは、よりよい社会をつくるためなのです。ここでの取り組みは、まさにそれだと思います。

本シンポジウムは、「ママと赤ちゃん復興まちづくり in 石巻」ということで、私は平日の午前の開催にすごくびっくりしたのですが、沢山の方がお越しくださいました。次はぜひ、『パパ』と赤ちゃんの復興まちづくりを開催して欲しいと思いました。ちょうど、(看板の)文字を入れ替えられます。

(宮城県助産師会の)後藤会長がいらっしゃいますか、開催地を「in 宮城」にさせていただいて、宮城で。そして、私は兵庫から来ていますから「兵庫」でしていただきたいです。また、大阪府立大学ですから、「大阪」でもしていただきたいです。これを是非、全国で展開して、石巻の経験を災害時支援の確固たるものにしていただけたらと思います。

本当に、皆さんと、もっといろいろな議論をしたいと思いますが、これは、皆さんと議論する始まりだと思います。次に、ぜひまたこういう機会を、さまざまなかたちで持っていただけたらと思います。

本日は、ベビースマイル石巻と(科研)復興・防災まちづくりとジェンダー主催、(科研)過疎と災害に resilient な妊産婦支援ネットワークの構築のための基盤的研究共催、東北すくすくプロジェクトと、chibito さんにご協力をいただきました。また、石巻市社会福祉協議会、お産と子育てに強いまちづくりチーム、一般社団法人宮城県助産師会の皆さまからも後援をいただきました。本当に多くの方のおかげで、このような会を開催できたことを感謝申し上げます。

この動きを皆さんでつなげて、マスメディアの方にもご協力いただいて、世界へ発信していけたらと思います。本日は、本当に、どうもありがとうございました。

シンポジウムの成果と今後について

シンポジウムのまとめと今後の調査研究に関する検討会

ジェンダーと災害復興研究会

2014年10月24日 13:00~14:30

宮城県石巻市向陽地区コミュニティセンター

【1】自己紹介(参加者は別紙参照)

【2】本日のシンポジウム、および石巻市の現状と課題について(意見交換)

(1) このシンポジウムの開催によって実現したこと

- ・様々な立場から妊産婦支援を考える人々の出会いと問題の共有
- ・石巻市庁内での話し合い

(2) 石巻市の現状と課題

- ・防災への意識が低くなっている(防災訓練への参加者の減少等)。
- ・備蓄その他、妊産婦への配慮は不十分である。
- ・若年や無配偶、孤立した状況の母親が増加している。
- ・被災経験のある母親は、なかなか自分の経験を振り返ったり語ったりすることができないまま過ごしている。3年以上経った今だからこそ、話せる機会や相談窓口等が必要となっている。
- ・妊産婦としての被災の経験が、今、母親になろうとしている人たちに伝えられていない。防災・減災の観点から重要な問題である。
- ・外国から石巻に移住した女性たちについても、取組が必要である。

【3】以上のまとめとして、今後の課題について

(1) 地域ネットワーク：石巻市での支援ネットワークづくり

- 当事者であるママ・NPO・行政・専門職等が、このシンポジウム開催で出来た繋がりを活かし、それぞれの力を発揮できるように。

(2) 政策・行政：庁内での連携。石巻市地域防災計画に「妊産婦/母子」の項目を入れる

- 次期計画に記載されるよう、皆で働きかけることが大切。

(3) 市民のエンパワメント：パパを巻き込んだ復興/防災セミナーの開催

- いざという時には自分たちで赤ちゃんを産めるように！

(4) 展開：ママと赤ちゃんの復興まちづくり in 宮城の開催検討

- 「ジェンダーと災害復興」科研。宮城県助産師会にも協力していただく。

(5) 成果公開：YouTube(映像)、ラジオ石巻(音声)、印刷物(簡易版、詳しい版)

- 同意確認その他について。

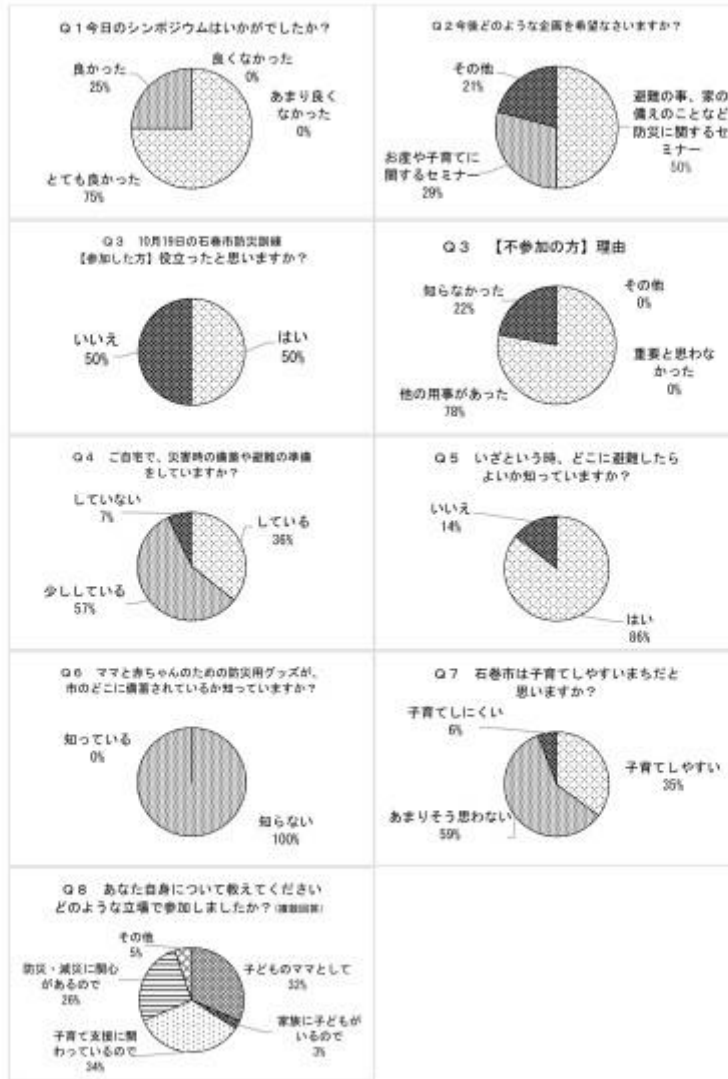
以上(文責 田間)

(別紙：検討会参加者リスト)

氏名	備 考
荒木裕美	ベビースマイル石巻代表
山地久美子	GDR 科研代表
田間泰子	GDR 科研分担研究者・田間科研代表
陳来幸	多文化と共生社会を育むワークショップ GDR 科研分担研究者
金千秋	多文化と共生社会を育むワークショップ GDR 科研研究協力者
小田嶋清美	パネリスト
真板雪衣	パネリスト
水沼文子	パネリスト
小林真紀	パネリスト
中居みずほ	司会 ベビースマイル石巻スタッフ

参加者アンケート結果

(回答数29人。うち石巻市市民15人、非市民14人。)



<p>Q2 自由記述</p> <p>今後どのような企画を希望なさいますか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お年寄りも含めた防災セミナー。 ・すべての防災（安全）文化はのちとつながっている。テーマ「人と自然と協働」です。 ・小さな単位でもまちづくりの防災の話があえるとよいと思います。地域としては平時から、ママや赤ちゃんにやさしいまちになってもらいたいと思います。 ・パパと赤ちゃんのセミナーについてぜひやっていただきたい。 ・働くママのためのお願いです。仕事と家庭の狭間で今も悩んでいます。いざという時、仕事より子ども、と思いますが、保育士の方に守って頂いたのもあるので、自分も簡単に仕事を離れられないとおもう。 ・助産師の小田嶋さんが言われた救急訓練の様な妊婦さんのケアの講習。
<p>Q3 自由記述</p> <p>【石巻市民のみ】</p> <p>10月19日の石巻市防災訓練に参加しましたか？</p>	<p>【参加した方】役に立ちましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行っても物に何もないから。 ・避難経路の確認ができた。 ・学校に備えがあることを知り安心した。安全な地域なので、参加者は少ない、もしもの時この中で自分が何をすべきか考えた。
<p>Q7 自由記述</p> <p>石巻市は子育てしやすいまちだと思いますか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サークルは多いがその母子を支援する人が少ないと思う。 ・情報が案外ある。でもWebにまとまっているととっても良いです。 ・他の町に住んだことがないので、比較はできませんが、ベビスマのイベントに参加させて頂くようになって、そう思うようになりました。（人とのつながり、情報など） ・NPO法人の活動などが多いが、行政で行っている活動が少ないと思うNPO法人の活動などが多いが、行政で行っている活動が少ないと思う。 ・遊ぶ公園が少なくなった。 ・産婦人科が震災後足りないとのことで、対応してもらいたい。公園が少ないような気がする。子どもが安心して遊ぶ場所を。 ・市民ではないのでわかりませんが、今回のようなセミナーが開かれるならきっと子育てに理解があると思います。 ・行政が子育てに力を入れていると思いきいにくいです。やっとう市民の声を聞き始めたと思えるので続けてください。NPO等民間はがんばっているけれど... 保健師さんや保育者はがんばってくれていると思います。 ・行政からの母子支援がとて少ない。救いを求めてもあまり考えてくれない。 ・産科の病院が少ないと子育てしにくそうに思う。 ・神戸市民なので？ですが、このセミナーがあることはプラス点です。
<p>その他の感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・この度はありがとうございました。石巻中心市街地のまちづくりと防災プロジェクト。地域づくりの取り組みをしている中、妊婦さんや赤ちゃんの防災について勉強させて頂きたくて参加させて頂きました。当地の取組みは赤ちゃんに関する内容が欠けているので、今後の参考にさせて頂きます。 ・ママたちのお話貴重でした。ありがとうございました。 ・スタッフの皆様、関係者の皆様すばらしい内容でした。ありがとうございました。

ママと赤ちゃんと皆のためのまちづくりに向けて

荒木 裕美

震災時の経験をもとに、妊婦や乳幼児の当事者ネットワークの必要性と、それを地域へしっかりとつなぐ活動をしてきました。「緊急時に困らない」ために、妊婦や乳幼児をもつ家庭にどのように体験を伝えるか、どのようにして、震災を体験した私たちの後輩となる母親たちが安心して子どもを産み育てることができる地域にするか。NPO法人ベビースマイル石巻は、緊急時にニーズが大きく高まって動き出した団体ですから、ふだんの楽しいイベントやサロンのベースには震災ケアだけでなく、防災への取り組みがあります。

『妊婦さんの防災』というキーワードで市役所内に担当課を探しに行きましたが、『どこも関係はあるけれど、担当課ではない』ということにびっくりしました。

しかし、だからこそ、NPOである私たちの果たす役割は重要であると感じました。行政や地域と妊婦、乳幼児をもつ家庭をつなぐパイプ役として、緊急時ただちに連携を開始できるよう、協働で体制づくりをしていきたいと思っております。

今回のシンポジウムでは、震災当時妊婦だったお2人、川名淳子さん、小林真紀さんに地域のためになるならと勇気を出してご協力いただき、本当に胸が熱くなりました。また、司会をしてくれた団体スタッフ、川村良美さん、中居みずほさん、有り難うございました。そしてシンポジウムに足を運んでくださった皆様のなかにたくさんの当事者仲間の姿が見え、震災からの4年間を想うと共に、地域をみんなで良くしていける！と力をいただきました。御関係者の皆様、ありがとうございました！

『ママと赤ちゃんの復興まちづくり in 石巻』シンポジウムを終えて

田間 泰子

このシンポジウムは、多くの方々のご協力によって実現しました、本当に有難うございました。開催までに震災から3年半、報告書は4年後の3月によりやく出すことができました。それでもまだ、被災地の復興まちづくりは続きます。アンケート結果をみると、石巻市は、市民から子育てがしやすいまちだと思われていないようです。また、防災教育・お産や子育てのセミナーのニーズは高く、備蓄や避難準備などの防災意識をもっと高める必要もあると思われます。そのためには、市民と行政の連携が必須だと思いますし、何よりも市民が力をつけて復興まちづくりの主役になることが必要です。専門職の方々や私のような被災地以外の者など、多様な立場の人々が、それを支えねばならないでしょう。

シンポジウムの開催と報告書の刊行が、ママと赤ちゃんが大切にされるまちづくりの一つの契機となりますよう、心から願っています。

最後に、シンポジウム当日に石巻で一緒に手伝ってくださった東芝佳奈子さん、開催準備から報告書作成まで手伝ってくださった山形友恵さんにも心から感謝申し上げます。

みなさま、有難うございました。

子ども・子育て支援へ

石巻市社会福祉協議会

近年核家族化が進み、育児に対して不安やストレスを感じている方や手助けを必要としている若い世代の方々が増えています。誰もが安心して子どもを産み、育てていくためには、地域全体で子育てしている世帯を見守り、共に育てていくことが大切ではないかと感じています。

自分自身の悩みを心の中に閉まっていたのは誰も気づかず、誰にも伝わりません。同じ悩みを抱えた仲間が集うことで、輪は広がりそこから、つながりが生まれ、絆が強くなります。子育てに関して同じ悩みを持つ方々が集まり「ベビースマイル石巻」が設立されたのだと思います。

ベビースマイル石巻の活動は新聞報道等で知ってはいましたが、実際に関わらせて頂いたのは1年前からでした。子ども支援や子育て支援を考えていたものの何から始めれば良いのか迷っているところ、代表の荒木さんより、事業の事でお話を伺った時から、お付き合いが始まり、事業がある毎に声をかけてもらい協力させて頂いております。また、社協のボランティアセンター運営委員としてもご協力いただき、子育て世代を代表してご意見を頂いております。

今回のシンポジウムにおいては、妊婦の方、助産師の方、看護師の方といろいろな立場で震災時の貴重なお話を聴くことができたことは、今後の減災・防災に関しても参考となるものでした。また、助産師さんからの「陣痛は、安心・安全・リラックスできる場所でしか起こらない」というお話では、改めて出産の神秘的なものを感じました。今後このようなシンポジウム開催の際には、社協としてお手伝いしたいと思っておりますので、お声掛け下さい。

今後も子育て支援に対して側面的支援をしつつ、より良い地域づくりを推進して行きたいと思っておりますので、お力添えをお願いいたします。

また、子育て世代が今後の石巻市の復興に向け大きな担い手やリーダーになっていくことは、間違いないことであり、そのために子育てしやすい環境・地域づくりが不可欠であることは言うまでもありません。この方達と共に魅力ある石巻市の地域づくりを目指していきたいと考えております。

まだまだ「福祉」という言葉のイメージは「障害者・高齢者」といったような認識の方もいらっしゃると思います。もちろん、障害者・高齢者支援は必要ではありますが、子どもから大人・高齢者まで全ての人々の幸せが福祉であることを皆様知ってほしいと思っております。そのようなことから社協としても、子育て支援については、より一層協力していかなければならないと感じました。

ここまでお話をさせていただきましたが、本市の子育て支援について、具体的に何を必要としているのか、何を求めているのか、といった情報がなく、「子ども・子育て支援をしたい」という思いだけで、実際に何をすべきかが解らないところが多くありますので、今後ともご指導ご鞭撻を宜しくお願いいたします。

『ママと赤ちゃんの復興まちづくり in 石巻 報告書』

発行年月日：2015年3月10日

編集発行者：非営利特定活動法人ベビースマイル石巻 代表理事 荒木裕美
日本学術振興会科研費『復興・防災まちづくりとジェンダー』代表 山地久美子
大阪府立大学 田間泰子

印刷所：株式会社ケーエスアイ

本報告書の印刷には下記の助成金が使用されています。

文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)25380869

『過疎と災害に resilient な妊産婦支援ネットワーク構築のための基盤的研究』

(代表：田間泰子)

